

九州横断自動車道関係  
埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

# 荏隈杉下遺跡

1 9 9 9

大分県教育委員会

九州横断自動車道関係  
埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

# 荏隈杉下遺跡

1 9 9 9

大分県教育委員会

## 序 文

大分県教育委員会では、日本道路公団の委託を受けて昭和56年以来、九州横断自動車道建設に伴う発掘調査を進めてまいりました。平成8年11月には庄ノ原～米良間の供用が開始され、全国と大分を結ぶ主要幹線道路として重要度が高まっているところです。

今回所収の荏隈杉下遺跡は、平成4年から平成5年にかけて発掘調査が行われ、縄文時代晩期をはじめ弥生時代、平安時代の遺構・遺物が発見され、大分平野の歴史を考察する上で貴重な資料を得ることができました。

この報告書が、埋蔵文化財の学術研究のみならず、多くの県民に活用され、歴史・文化の発展に少しでも寄与できれば幸いです。

最後に、調査に当たって様々な分野からの御助言・御協力に対して心より感謝するとともに、今後とも大分県教育委員会の文化財保護行政に対して御理解と御協力を賜りたいと存じます。

平成11年3月31日

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

# 例 言

1. 本書は、九州横断自動車道の建設に伴い日本道路公団福岡建設局の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した大分市荏隈地区の発掘調査報告書である。
2. 本書に報告する遺跡は、平成4年度から7年度にかけて本調査を行った遺跡の内、荏隈杉下遺跡についての調査報告である。
3. 本書の編集・執筆は、付論が大分短期大学の佐々木章氏の手により、それ以外は江田が行った。
4. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁文化課文化財資料室で保管している。
5. 報告書内に使用した座標は、昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系である。図郭に表示してある座標値はキロメートル単位である。
6. 炎天下の元、調査にたずさわっていただいた作業員の皆さんに深く感謝いたします。

# 目 次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査団の構成	1
3. 遺跡の立地と環境	1
II. 調査の成果	3
1. 調査の概要	3
2. 基本土層	3
3. 遺構と遺物	4
1) 溝状遺構 1	4
出土遺物 石器	4
土器	6
2) 溝状遺構 2	12
出土遺物 石器	12
土器	16
3) 溝 1	22
出土遺物	22
4) 包含層	23
石器	23
土器	24
III. まとめ	40
付論 荏隈杉下遺跡溝状遺構 1 土壌のプラントオパール分析結果からみた水田の開始	42



## 挿 図 目 次

第1図	荏隈杉下遺跡と周辺遺跡分布図	2
第2図	荏隈杉下遺跡位置図	3
第3図	荏隈杉下遺跡基本土層図	4
第4図	荏隈杉下遺跡遺構配置図	5
第5図	溝状遺構1実測図	6
第6図	溝状遺構1出土石器実測図	8
第7図	溝状遺構1出土土器実測図(1)	9
第8図	溝状遺構1出土土器実測図(2)	10
第9図	溝状遺構2実測図	13~14
第10図	溝状遺構2出土石器実測図	15
第11図	溝状遺構2出土土器実測図(1)	18
第12図	溝状遺構2出土土器実測図(2)	19
第13図	溝状遺構2出土土器実測図(3)	20
第14図	溝状遺構2出土土器実測図(4)	21
第15図	溝1実測図	23
第16図	溝1出土土器実測図	23
第17図	包含層出土遺物分布図	25
第18図	包含層出土石器実測図(1)	26
第19図	包含層出土石器実測図(2)	27
第20図	包含層出土土器実測図(1)	29
第21図	包含層出土土器実測図(2)	30
第22図	包含層出土土器実測図(3)	31
第23図	包含層出土土器実測図(4)	32
第24図	包含層出土土器実測図(5)	33
第25図	包含層出土土器実測図(6)	34
第26図	包含層出土土器実測図(7)	35
第27図	包含層出土土器実測図(8)	36

## 表 目 次

表1	溝状遺構1出土石器観察表	6
表2	溝状遺構1出土土器観察表(1)	7
表3	溝状遺構1出土土器観察表(2)	11
表4	溝状遺構2出土石器観察表	16
表5	溝状遺構2出土土器観察表(1)	17
表6	溝状遺構2出土土器観察表(2)	21
表7	溝状遺構2出土土器観察表(3)	22
表8	包含層出土石器観察表	24
表9	包含層出土土器観察表(1)	37
表10	包含層出土土器観察表(2)	38

表11	包含層出土土器觀察表 (3).....	39
表12	包含層出土土器觀察表 (4).....	40

## 写真図版目次

図版—1	調査区
図版—2	調査区
図版—3	石器
図版—4	石器
図版—5	溝状遺構1出土土器
図版—6	溝状遺構2出土土器
図版—7	溝状遺構2出土土器
図版—8	溝1・包含層出土土器
図版—9	包含層出土土器

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

九州横断自動車道は、昭和47年6月30日に計画決定され、その後昭和48年10月19日に整備計画決定および施行命令が出された。大分県教育委員会では、日本道路公団福岡建設局の委託を受け、昭和49年5月から道路建設予定地の分布調査を開始して昭和54年でこの作業を終了した。

この結果大分県内全区間約103kmのうち、湯布院～別府間23.9kmについては9ヵ所、別府～大分間14.8kmは3ヵ所、大分～大分間7.9kmは9ヵ所の遺跡がそれぞれ確認された。

これらの遺跡は湯布院～別府間が昭和59年度から昭和60年度まで、別府～大分間は昭和59年度から平成3年度で調査を終了した。

大分～大分間は、平成4年度～平成7年度にかけて荏隈杉下遺跡、玉沢地区条里跡の六反田地区・山伏田地区・二反田地区の4ヵ所の発掘調査を実施した。今回報告を行うのはこのうち、荏隈杉下遺跡である。

## 2. 調査団の構成

調査期間 平成5年2月～平成5年12月

### 調査体制

総括	大分県教育委員会教育長	宮本 高志
	文化課長	秋葉 正嗣（平成4年度）
		末広 利人（平成5年度）
	文化課課長補佐	衛藤 伸一（平成4年度）
		岡 忠生（平成5年度）

### 調査

調査委員	大分県文化財保護審議委員	
	別府大学教授	賀川 光夫
調査主任	文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長	渋谷 忠章
調査担当	文化課 主査	西 哲弘
	主任	江田 豊
	主事	染矢 和徳
	嘱託	須原 緑

### 発掘作業員

萩 昭八、秋吉貴子、飯田久美子、牧田スミ子、岡村登美子、園田睦子、佐藤イク子、高倉常子、今村すみ子、後藤静香、伊東真由美、安東和子、安部喜代、木村とし子、梅木孝幸、山本良子、松村寿子（敬称略・順不同）

## 3. 遺跡の立地と環境

### 1) 自然環境

荏隈杉下遺跡は大分平野の西部を流れる大分川が蛇行する流域沿いに所在する。ここは庄ノ原台地に多数刻まれた谷部のひとつから流れる小河川の堆積作用と大分川の支流である尼ヶ瀬川の沖積



作用によって形成されたところである。当遺跡の後背部には常緑広葉樹を主体とした林があり、谷部からは水が簡単に手に入れることができる場所でもある。反面、尼ヶ瀬川は最近まで大きな氾濫がくり返され、土層観察からも氾濫の痕跡が認められている。以上のことから、当地区が長期間の生活地域としてはやや不適であったとも考えられる。

## 2) 各時代の遺跡分布

荏隈地区は旧石器時代～縄文時代～古墳時代にかけての遺跡が点々と位置する。旧石器時代の遺跡は後背部の台地上にある庄ノ原遺跡群J区がある。ここは後期旧石器時代の石器や集石遺構が広範囲で確認された遺跡である。縄文時代の遺跡は庄ノ原遺跡群A～D区で、縄文早期の押型文土器や無文土器が出土している。しかし、かつてこの周辺地域では縄文時代の遺跡はこれ以外にほとんど確認されておらず、空白地帯であった。荏隈杉下遺跡の調査以後宗方地区でも縄文時代の遺跡が点々と確認されるようになり、沖積地の微高地における縄文遺跡の展開が見られるようになった。たとえば荏隈杉下遺跡以外に玉沢地区条里跡遺跡群二反田地区、あるいは植田市遺跡や植田平石遺跡があげられよう。

弥生時代に入ると遺跡の分布は、微高地あるいは独立した台地上に多数の遺跡が確認されるようになる。特に尼ヶ城遺跡、雄城台遺跡や守岡遺跡は大分平野では代表的な弥生時代後期を主体とする集落遺跡で、それぞれの遺跡で後漢鏡片が出土している。さらに雄城台遺跡では巴型銅器が出土したことで注目されている。

古墳時代に入ると遺跡の数はさらに増えていく。庄ノ原台地上及びその周辺には大分平野の代表的な古墳が多数分布する。そのなかで蓬萊山古墳は前方後円墳で墳丘の長さは約60mを測り、墳丘部には葺石や壺型埴輪が見られる。主体部は箱式石棺で、古墳の造営時期は4世紀代とされる。また、後期に入ると千代丸古墳や丑殿古墳という石室墳が大分川とその支流の賀来川の段丘上に所在する。この時代の集落遺跡は北ノ後遺跡があげられるが沖積地内における当該時期の遺跡の展開がやや不明な部分もあり、今後の研究課題と言えよう。



第1図 荏隈杉下遺跡と周辺遺跡分布図



## II 調査の成果

### 1. 調査の概要

調査は、主に庄ノ原台地の裾部から賀来川までの約70mを対象として実施した。但しほぼ中央部にJR久大線が東西方向に走るため、一部調査ができない箇所もあった。

また、調査中に尼ヶ瀬川の氾濫によって調査事務所が水没し図面や写真、測量器材等に被害が出たといったハプニングにも見舞われた。

表土剥ぎを行った結果、古代の溝と弥生時代の溝状遺構がそれぞれ1条ずつ確認された。そこでまず溝の調査を行い、その後、包含層の調査へと進んでいったが、弥生時代の溝には、東側で矢板列の痕跡が認められ、さらに、弥生時代の溝状遺構がもう1条検出されたため、水田耕作が行われた可能性を想定し、プラント・オパール分析を行った。古代の溝は、ほとんど遺物は出土しなかったが、数点出土した土師器から、おおむね9世紀の所産と推定できよう。

包含層の遺物出土の密度はそれほど多くないが調査区のほぼ全域から出土した。但し遺構はピットが数基検出されたにとどまった。

出土遺物は主に縄文晩期後半から終末にかけての土器が主流をなし浅鉢、深鉢、鉢、高坏などが出土した。また石器は、石鎌や二次加工剥片、打製石斧、磨製石斧、磨石、凹石など剥片石器や礫石器が出土している。

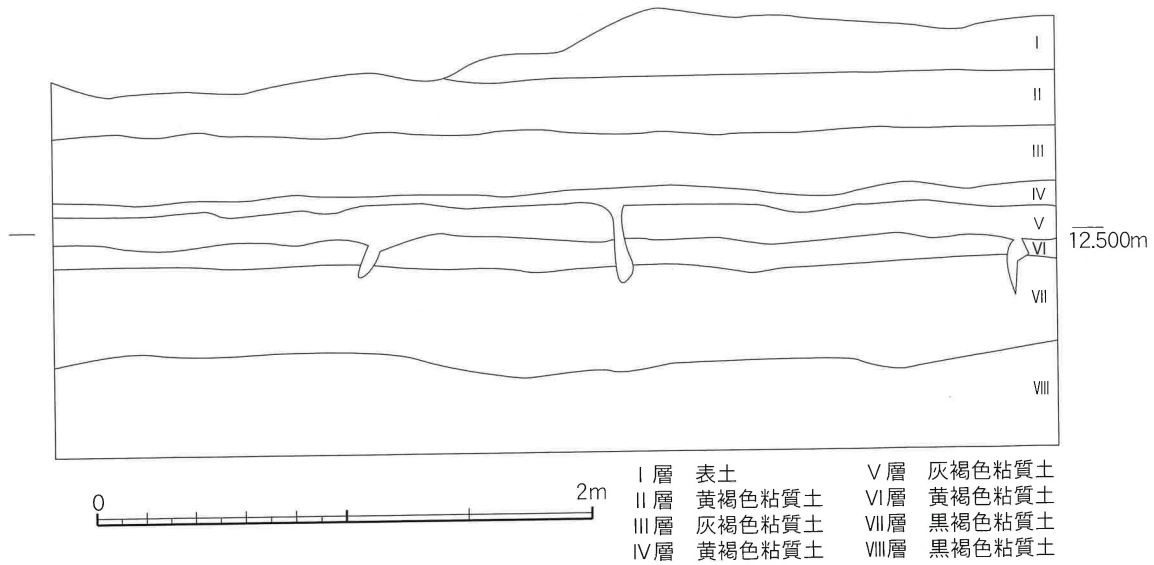
### 2. 基本土層

荏隈杉下遺跡の基本土層は第3図に示したように大きく8層に分けることができる。I層からIII層は近世以降の層で、数回の耕作が行われている。IV層からVII層は弥生から古代にかけての層で溝状遺構もVI層およびVII層から掘り込まれている。縄文時代の包含層は、VIII層に当たりこの層の上部から遺物は出土した。

なお、縄文包含層に相当する層からは検出されていないが、弥生時代に相当する層からプラント・オパールが検出されていて、イネが栽培されていた可能性も考えられるようである。



第2図 荏隈杉下遺跡位置図

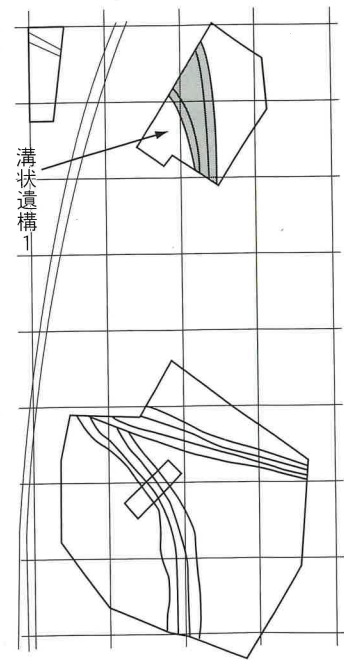


第3図 荇隈杉下遺跡基本土層図

### 3. 遺構と遺物

#### 1) 溝状遺構 1

調査区北側のB-2, B-3グリッドで検出された。確認された溝状遺構は長さ13m、幅5m、深さ0.8mである。方向は南南東の方向に緩やかに下っていく。溝状遺構の東壁側は2段構造で、西側の一部に段を持つ。溝状遺構の基底部分は平坦な様相を呈する。このB-2・B-3グリッドの北側には庄ノ原台地の裾部が迫っていて、さらにその裾部に刻まれた谷が複雑に存在する。おそらくこのような谷部には、大小の河道が存在していたものと思われる。この溝状遺構もそのような小河道と接するものと思われる。溝状遺構の内部には砂粒の堆積層が何層か認められている。出土した遺物から、この溝状遺構の時期は弥生時代後期後半から終末にかけてのものと思われる。

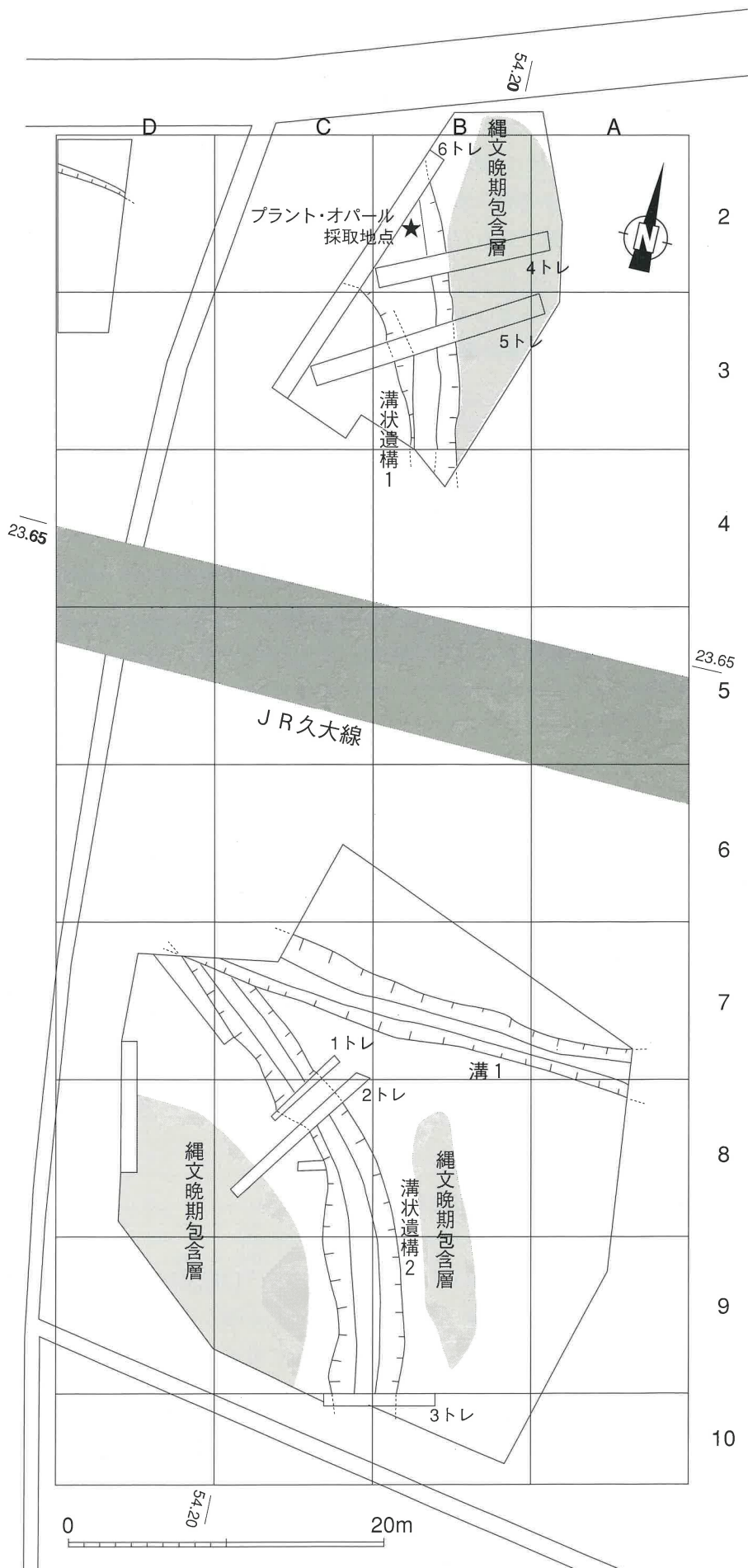


#### 出土遺物

##### 石器

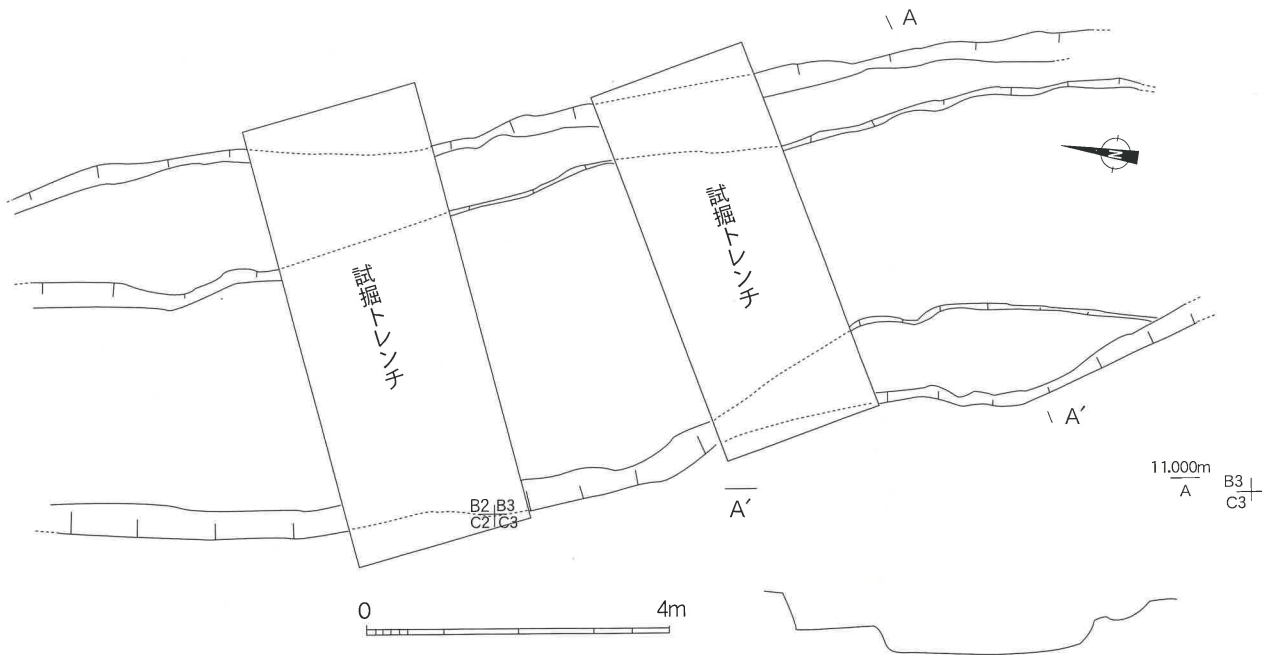
溝状遺構 1 から出土した石器は第6図に示した。打製石鏃6点、磨製石鏃2点、二次加工剥片1点、磨石2点、敲石2点である。このうち打製石鏃、二次加工剥片は縄文晩期の所産のもので、流れ込みの遺物と考えても差し支えない。礫石器の時期は特定できない。

1～6は打製石鏃ですべてサヌカイトを使用している。特に3・4は肩部のつく五角形の鏃で、縄文晩期に典型的なものである。7・8は磨製石鏃でいずれも結晶片岩を使用している。7は研磨痕や研磨によって作り出された稜が観察される。9は二次加工剥片で姫島産黒曜石の縦長剥片を素材としている。この剥片の両側縁部分に細かい二次加工を施し、刃部としている。10・11は磨石である。10は扁平な円礫を、11はやや丸みを帯びた円礫を使用している。10は両面に使用痕が認められる。周縁部は細かい敲打で整形している。11は片面使用で周縁部はほとんど加工は施していない。12・13は敲石である。扁平な円礫を用いて中央部分に使用痕がある。12は片面、13は両面に使用痕がある。



第4図 荏隈杉下遺跡遺構配置図





第5図 溝状遺構1 実測図

表1 溝状遺構1 出土石器観察表

挿図番号	出土地点	遺物番号	種類	石材	法量 cm・g				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
6図 1	溝状遺構1	一括	石 鎌	サヌカイト	1.8	1.4	0.4	0.7	
2	"	6	石 鎌	サヌカイト	2.6	1.7	0.4	1.5	
3	"	62	石 鎌	サヌカイト	2.4	1.3	0.4	1.0	
4	"	56	石 鎌	サヌカイト	2.7	1.0	0.3	0.9	
5	"	一括	石 鎌	サヌカイト	2.0	1.4	0.2	0.6	脚一部欠
6	"	一括	石 鎌	サヌカイト	1.8	1.0	0.3	0.4	脚欠
7	"	一括	石 鎌	結晶片岩	4.1	1.3	0.2	2.1	磨製石鎌
8	"	一括	石 鎌	結晶片岩	1.9	1.3	0.2	0.9	磨製石鎌
9	"	一括	二次加工剥片	姫島産黒曜石	4.4	1.9	0.5	3.9	
10	"	7	磨 石	安山岩	9.6	8.7	3.4	465.4	両面使用
11	"	52	磨 石	安山岩	7.4	9.0	6.5	687.6	片面使用
12	"	一括	敲 石	安山岩	9.4	8.7	5.6	643.3	片面使用
13	"	一括	凹 石	安山岩	12.5	11.4	6.0	857.6	両面使用

### 土器

溝状遺構1 から出土した土器は第7図及び第8図である。

#### 縄文晩期 (1~8・42~46・50・53)

1は浅鉢で、大きく開く胴部にほぼ直立した口縁部がつく。口縁部は、内面がやや肥厚して波状口縁を呈する。2~3は無刻目突帯を施した深鉢で、いったん張り出した胴部が内傾して立ち上がり、口縁部は若干外側に開く。突帯はこの開き始める部分に低くつけられる。4~6は刻目突帯の深鉢で、4は直立気味の口縁部で端部は平坦に仕上げられる。5は大きく外反する口縁部で、端部は丸く仕上げられる。6は直立気味の口縁部で、端部は5と類似している。7・8は深鉢の屈曲部である。このうち7は屈曲部に細かい刻目を施す。42~44・46は縄文時代晩期の浅鉢の底部で比較的薄い底部である。45は深鉢の底部で比較的厚手で台形状を呈し上げ底である。50・53は高坏で、50は脚の上端に突帯が1条施される。脚部は曲線的に開くものの短いものと思われる。53は直線的に裾が伸びるものと思われる。外面に丁寧なヘラミガキが施される。



弥生時代（9～30・32～41・47～49・51～52・54～55・57～61）

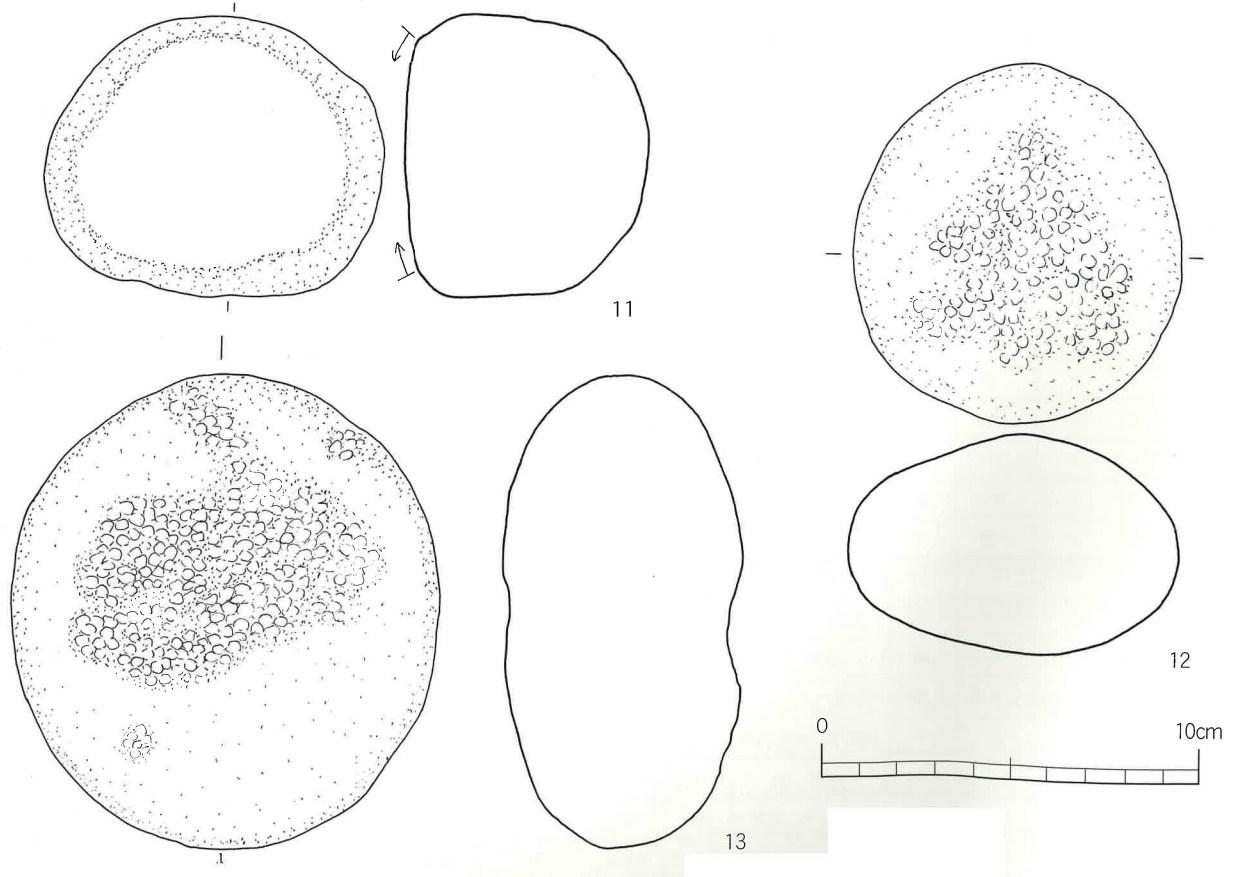
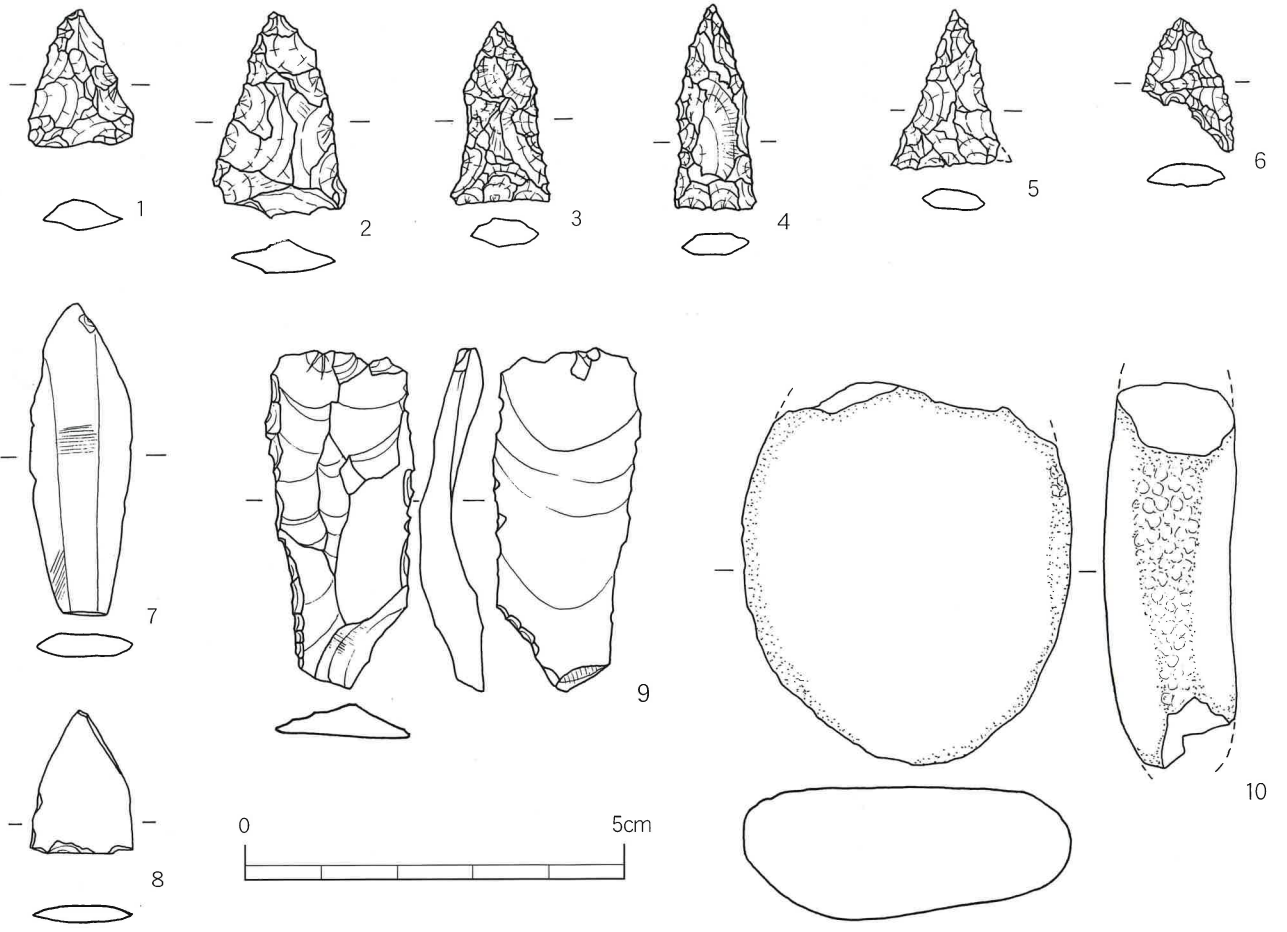
9～12は甕で、9は短い如意状口縁、10～12は比較的直行する口縁の直下に1条刻目突帯を施す下城式土器である。13は小型の鉢で、口縁部は「く」の字状に外反しわずかに肥厚する。胴部の張りはあまり無い。14～26は二重口縁壺である。頸部はしまり、やや短く立ち上がる。口縁部は直立あるいはやや内傾して立ち上がる。相対的に長めのものが多いが、わずかに短いものも含まれる。頸部には刻目状の突帯が施されるものと（14）、断面三角形の突帯を数条施すものがある（15・16）。さらに15は2条の突帯の下に勾玉状の飾りを施す。胴部は比較的張り出すものと思われる。27～30は壺で口縁部が大きく弧を描きながら外反していくものである。31は守岡遺跡I区19号住居から出土したものに類似する二重口縁壺である。32は頸部のしまる壺で口縁部は直立する。33～38は甕である。33～34は口縁部が大きく外反し口縁端部を跳ねあげ気味につまみあげる。35は口縁部がやや短く「く」の字状に立ち上がり、内面に稜線をもつ。36～38は直線的な口縁部が長く伸びる。41・47～49は甕の底部。51～52・54は高坏である。55～59は鉢である。55はボール状の胴部に大きく弧を描きながら外反する長い口縁部を持つ。60は蓋で、61はミニチュア土器である。

この溝状遺構1から出土した土器は大きく4時期に分けられる。まず1～8・42～45・50・53などを代表とする縄文時代晩期後葉の所産のもの。これは当遺跡に展開する晩期包含層から出土する縄文土器と同時期のものである。

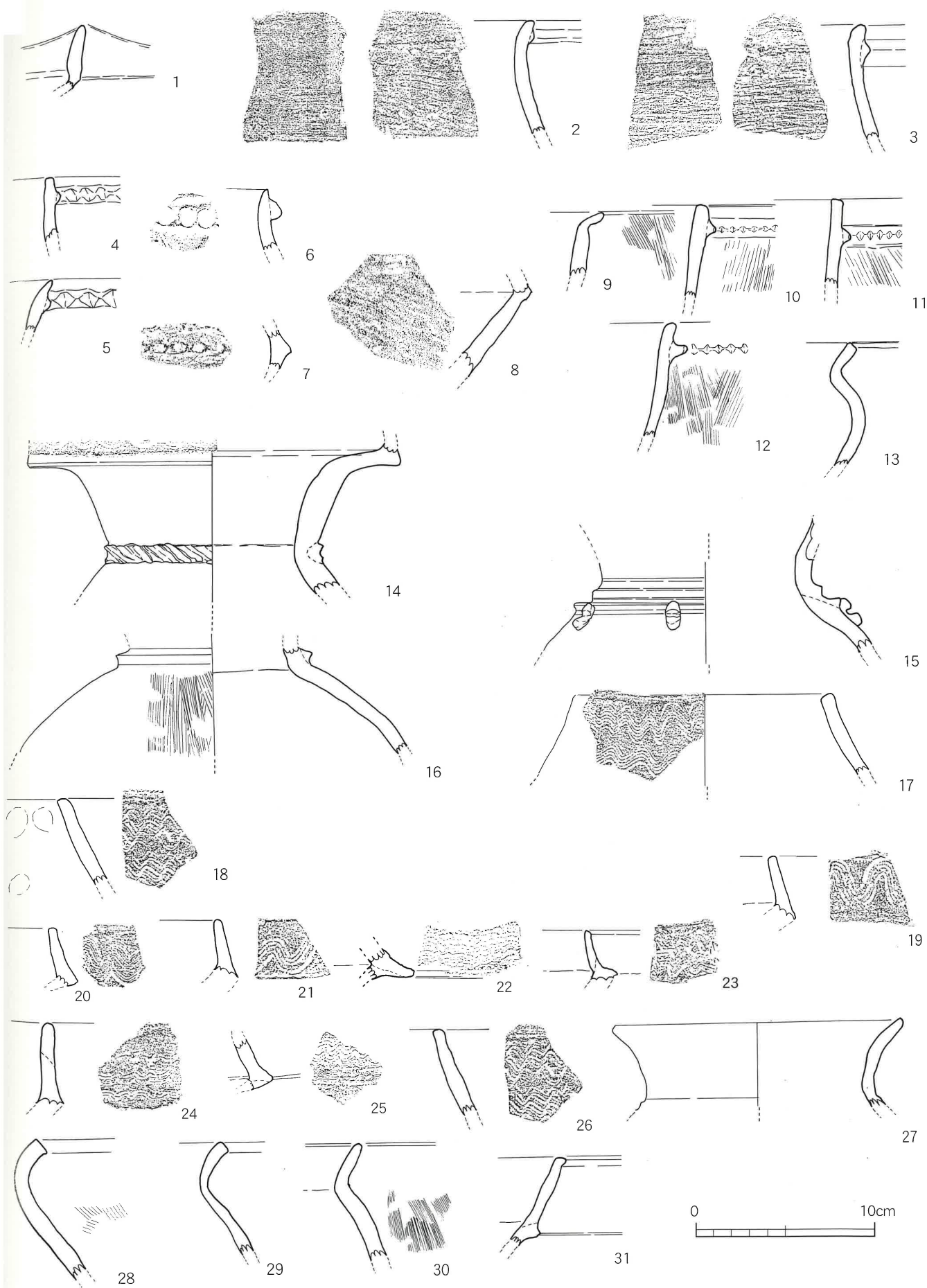
次に9～12の下城式土器や47～49の甕底部を中心とした中期初頭の所産のもの。絶対量は非常に少ない。さらに33～34といった中期後半から後期前半にかかるもの。これもその数量は少ない。最後に残りの二重口縁壺や甕などの後期後葉にかけてのもので、1点のみ古墳時代初頭と思われる31が含まれる。この時期にはいと数量も大幅に増大する。この溝状遺構が機能していた時期に関わる遺物群と推定される。

表2 溝状遺構1出土土器観察表（1）

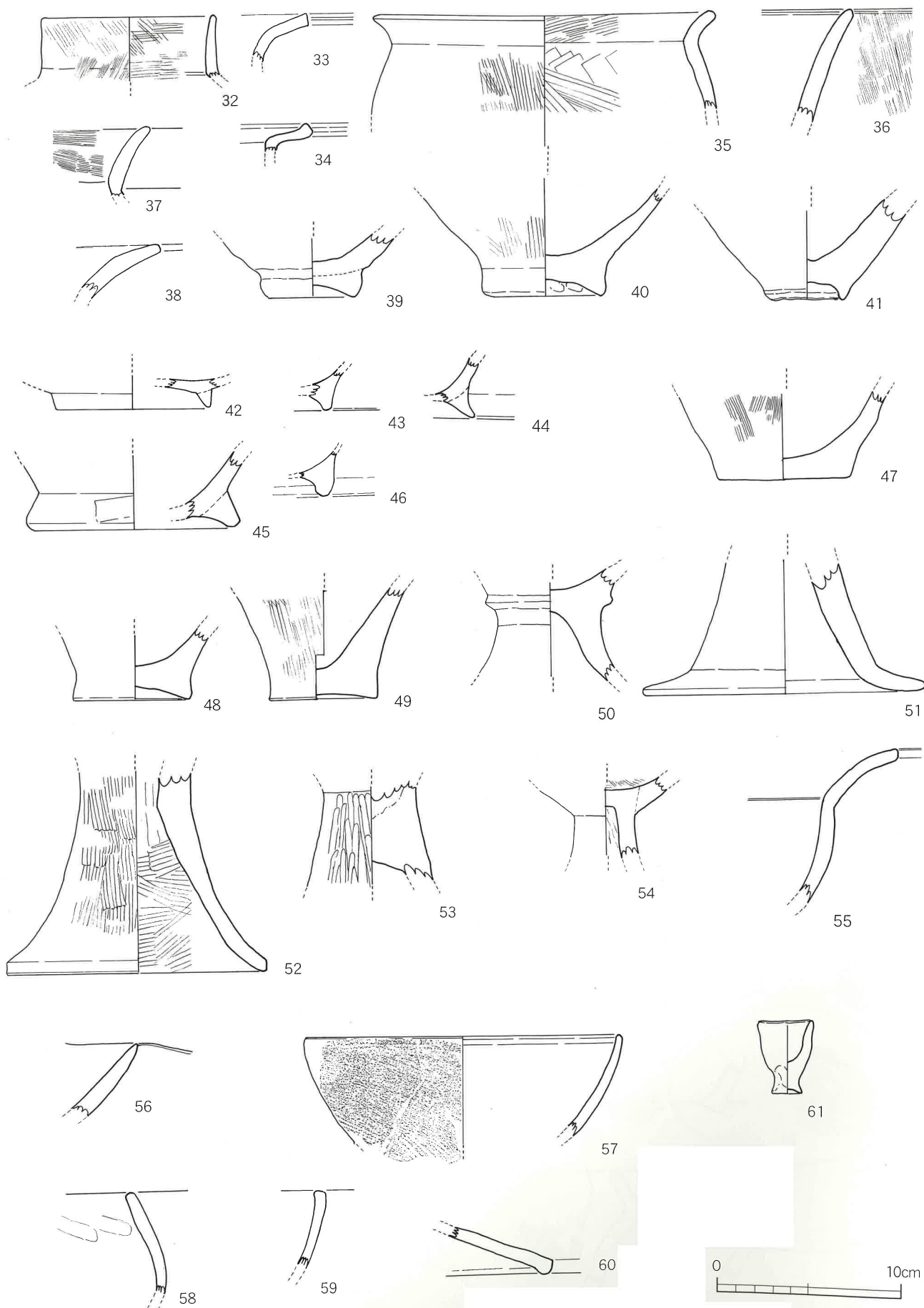
挿図番号	出土地点	遺物番号	器種	胎土	色調		調整		法量 (cm)				施文等	
					内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径		
7図 1	溝状遺構1	一括	浅鉢	角閃 長 石英	灰黄色	灰黄色	ナデ	ナデ						
2	"	"	深鉢	角閃 長 金雲	褐色	淡黄色	ナデ 貝殻条痕	貝殻条痕						無刻目突帯
3	"	"	"	角閃石 長	鈍い褐色	黒色	貝殻条痕	ナデ 貝殻条痕						"
4	"	"	"	角閃 長 石英	灰白色	浅黄色	ナデ	ナデ						刻目突帯
5	"	55	"	角閃 長	黒色	黒色	"	"						"
6	"	一括	"	"	明褐色	明褐色	"	"						"
7	"	"	"	"	"	"	"	"						胴部屈曲部に刻目
8	"	"	"	"	"	"	"	"						
9	"	29	甕	角閃 長 金雲	浅黄色	黒褐色	"	タテハケ						
10	"	一括	"	角閃 長 石英	灰白色	灰白色	"	ナデ後タテハケ						赤変 1条刻目突帯
11	"	"	"	角閃 長	"	"	"	"						1条刻目突帯
12	"	"	"	角閃 長 石英	淡橙	鈍い黄褐色	"	タテハケ						"
13	"	"	鉢	角閃 長	黒色	黒色	ナデ後ミガキ	ヘラミガキ						赤彩あり
14	"	"	壺	"	淡黄色	淡黄色	ナデ	櫛描波状文	21					頸部に刻目突帯
15	"	"	"	角閃 長 石英 金雲	"	"	"	ナデ						頸部に三角突帯2条
16	"	"	"	角閃 長	鈍い橙色	鈍い橙色	ココナデ	ナデ タテハケ						頸部に三角突帯2条
17	"	41	"	角閃 長 金雲	褐色	褐色	ナデ	櫛描波状文	14.6					
18	"	一括	"	角閃 長 石英 金雲	灰白色	明褐色	"	櫛描波状文						
19	"	"	"	角閃 長	淡黄色	淡黄色	"	櫛描波状文						
20	"	30, 34	"	角閃 長 石英	灰黄褐色	明黄褐色	"	櫛描波状文						赤彩あり



第6図 溝状遺構1出土石器実測図



第7図 溝状遺構1出土土器実測図(1)



第8图 溝状遺構1出土土器実測图(2)



表3 溝状遺構1出土土器観察表(2)

挿図番号	出土地点	遺物番号	器種	胎土	色調		調整		法量(cm)				施文等	
					内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径		
7図 21	溝状遺構1	一括	壺	角閃長	浅黄色	浅黄色	ナデ	櫛描波状文						
22	"	"	"	角閃長 石英 金雲	灰白色	明褐色	"	櫛描波状文						
23	"	"	"	角閃長	鈍い黄橙	鈍い黄橙	"	櫛描波状文						
24	"	31	"	"	浅黄橙	橙色	"	櫛描波状文						
25	"	40	"	"	淡黄色	淡黄色	"	櫛描波状文						
26	"	一括	"	角閃長 石英 金雲	"	明赤褐色	"	櫛描波状文						
27	"	"	"	角閃長 金雲	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	16.5					
28	"	"	"	"	"	明褐色	ナデ	ナデ タテハケ						
29	"	"	"	角閃長	鈍い黄橙	鈍い黄橙	"	ナデ						
30	"	"	"	"	灰褐色	灰黄褐色	"	ハケ						
31	"	"	"	角閃長 金雲	褐色	浅黄橙	"	ナデ						
8図 32	"	"	"	角閃長	明褐色	淡黄色	ハケ	ナデ タテハケ	9.5					黒斑あり
33	"	"	甕	"	褐灰色	褐灰色	ナデ	ナデ						
34	"	"	"	"	淡黄色	淡黄色	"	"						黒斑あり
35	"	37	"	"	鈍い黄橙	黒褐色	ナデ	ナデ タテハケ	18.8					
36	"	5	"	"	灰白色	灰白色	ハケ	ナデ						
37	"	一括	"	"	"	"	ナデ	"						黒斑あり
38	"	"	"	"	"	鈍い黄橙	"	"						
39	"	"	"	"	褐色	赤褐色	"	"					5.6	
40	"	"	壺	"	黒褐色	灰黄褐色	"	"					6.8	
41	"	22	甕	角閃長 石英 金雲	褐色	淡黄色	"	"					4.5	
42	"	一括	浅鉢	角閃長	"	褐色	"	"					8.6	
43	"	48	"	角閃長 石英 金雲	淡黄色	鈍い黄橙	"	"						
44	"	一括	深鉢	角閃長	灰黄色	橙色	"	"						
45	"	"	"	角閃長 石英 金雲	"	灰黄色	"	"					11.8	
46	"	16	"	"	鈍い橙	鈍い橙	"	"					4.5	
47	"	一括	甕	角閃 石英	灰白色	浅黄橙	"	ナデ タテハケ					7.2	
48	"	"	"	角閃長 石英 金雲	鈍い橙	鈍い橙	"	ナデ					6.4	
49	"	"	"	角閃長	黒褐色	鈍い黄橙	"	ナデ タテハケ					5.9	
50	"	"	高杯	"	灰白色	浅黄橙	"	ナデ						赤彩くびれ部に突帯
51	"	"	"	角閃長 石英 金雲	黒褐色	褐色	"	ハラミガキ					15.6	赤彩あり
52	"	68, 70	"	"	浅黄色	浅黄色	ハケ シボリ	ナデ タテハケ					14.5	黒斑あり
53	"	一括	"	"	鈍い橙	鈍い橙	ナデ	ハラミガキ						
54	"	12	"	角閃長 石英	"	"	ハケ	ナデ						
55	"	一括	鉢	角閃長	橙色	橙色	ナデ	"						
56	"	32	"	角閃長 金雲	褐色	褐色	"	"						
57	"	17, 19	"	"	浅黄橙	浅黄橙	"	細かいハケ	17.5	6.5				
58	"	13, 14	"	角閃長	鈍い黄橙	鈍い褐色	ナデ ケズリ	ナデ						
59	"	一括	"	"	灰白色	灰白色	ナデ	"						
60	"	"	蓋	"	褐灰色	褐灰色	"	"						
61	"	"	壺	"	黄灰色	灰白色	手握ね ナデ	手握ね ナデ	3.2	4		1.8		ミニチュア土器

## 2) 溝状遺構 2

溝状遺構 2は、C-7グリッドからB-9グリッドにかけて南東方向に若干カーブを描きながら流れる。確認された全長は約30mで北側の幅が約3m、南側に進むにしたがって幅は広がり、中央部分で約5.8m、南端部で4.7mを測る。深さは0.6m～0.8mである。

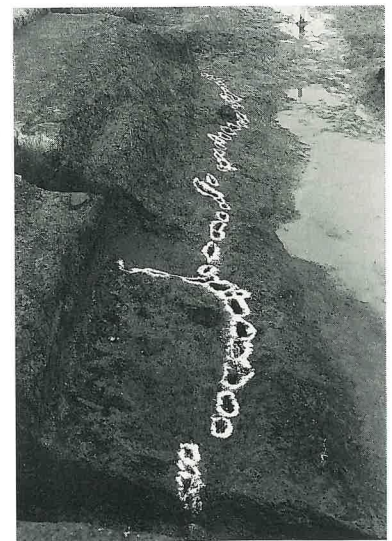
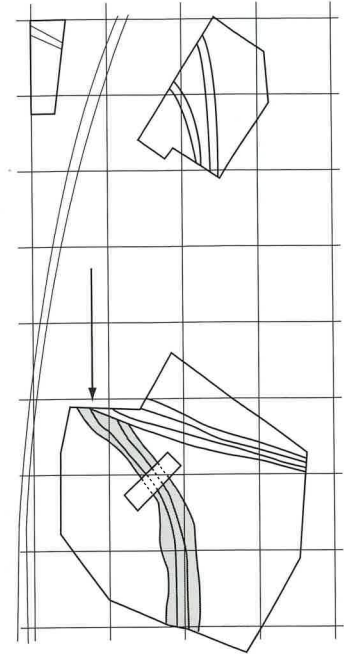
掘り方は両壁とも2～3段の階段状で、基底部分は幅1.5m程度のフラットな形状である。南側は段が複雑に入り込み幅40～60cmの帯状のテラス面が造り出されている。土層観察では、弥生～古墳時代に相当する層から、縄文晩期包含層が確認された層まで掘り込まれている。また、遺構内には砂層とシルト層が互層に堆積していて、流れこむ水のもたらした堆積作用で遺構の幅が東から西に狭まる過程が確認された。

この溝状遺構南端から9mの範囲では、杭列及び矢板列と思われる遺構が確認された。いずれの遺構も杭痕及び矢板痕のみの検出で、木質等は確認されなかった。矢板列は溝の西側壁2段目のテラスに約2.5mの長さで溝の方向とほぼ並行する形で検出された。杭・矢板は一つの単位が幅10～20cm、厚さ2～4cmで南端から約1.3mごとにL字状に設けている。

杭列は、東側壁の立ち上がり部分に1群(A群)、矢板列と並びを合わせて1群(B群)、A群から北に約3m上がった部分に1群(C群)検出された。

A群は長さ2.4mですべて直径5～8cmの丸杭を用いていて、やや雑然とした並びである。B群は1.9mの長さで、割杭と丸杭をほぼ半分ずつ用いている。北端部分は矢板列と同様L字状に曲げられている。C群は5mの範囲に直径4～8cm程度の丸杭を雑然と配置している。

A～C群はいずれも上面を後世の堆積等でカットされていて、全体像をうかがい知る術はないが、現況で判断すると取水口などの水利施設等は考えにくく、いずれも溝の土止め等を目的とした施設と想定しておく。



## 出土遺物

### 石器

溝状遺構 2から出土した石器は打製石鏃、磨製石鏃、スクレイパー、磨石、凹石で第10図に示している。

#### 打製石鏃 (14～17)

14はほぼ正三角形の鏃で両方の脚部が一部欠損している。姫島産黒曜石を用いている。15は二等辺三角形の鏃で脚部は丸く仕上げられ、抉りは浅い。姫島産黒曜石を用いている。16はハート型で抉りが深い。脚の一部を欠損している。姫島産黒曜石を用いている。17は先端部を大きく欠損した鏃でおそらく二等辺三角形の形状を呈するものと思われる。サヌカイトを用いている。



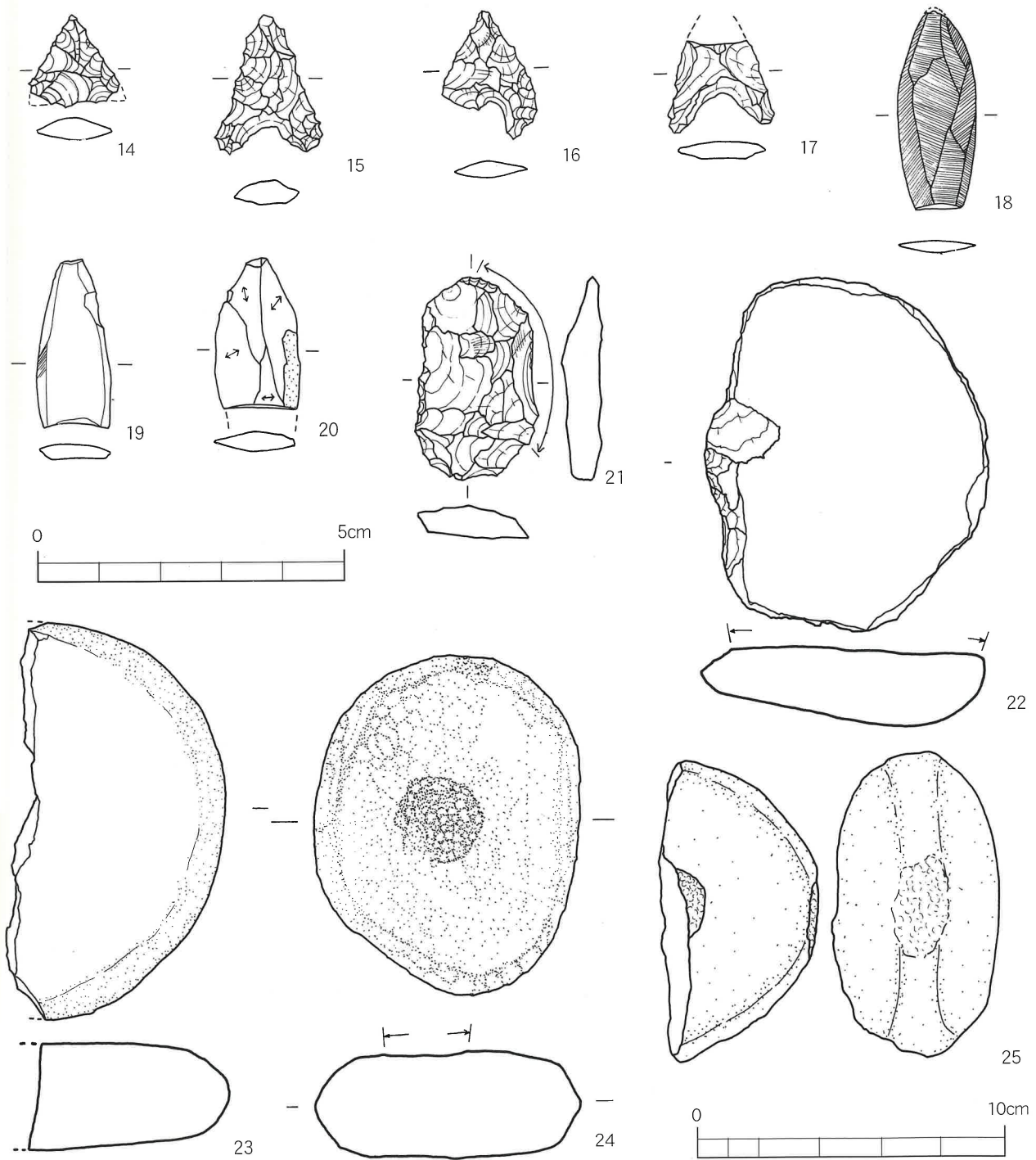


磨製石鏃 (18~20)

18は結晶片岩製の鏃で、研磨痕が明瞭に観察される。先端部はわずかに欠損しているがほぼ完形品である。最大幅が中央部にあり柳葉型の形状を呈する。基部は平基である。19は結晶片岩製の鏃で、研磨痕はほとんど観察されない。両側縁部の刃部は丁寧な研磨で造り出されている。先端部は欠損しているが最大幅が基部付近にあり18とはやや形状が異なる。20は下半分が欠損している。結晶片岩を用いている。

スクレイパー (21)

姫島産黒曜石の縦長剥片を素材としたもので、主要剥離面を大きく残す。側縁部の一部に細かい二次加工を施して刃部としている。



第10図 溝状遺構 2 出土石器実測図



## 磨石 (22・23)

22・23とも安山岩の扁平な礫を用いている。22については片面使用、23は側縁部に整形の痕跡が認められる。両面とも使用している。

## 凹石 (24・25)

24は安山岩の扁平な礫を用いて、側縁部の整形を行っている。使用痕は片面のみに観察される。25は凝灰岩の円礫を用いる。使用面は2カ所観察される。

表4 溝状遺構2出土石器観察表

挿図番号	出土地点	遺物番号	種類	石材	法量 cm・g				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
10図14	溝状遺構2	230	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.4	0.3	0.6	両脚欠
15	"	270	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.7	0.3	0.7	
16	"	172	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.5	0.2	0.6	片脚欠
17	"	12	石鏃	サヌカイト	1.5	1.7	0.3	0.6	先端欠
18	"	214	石鏃	結晶片岩	3.2	1.2	0.2	1.6	磨製石鏃
19	"	205	石鏃	結晶片岩	2.7	1.2	0.2	1.0	磨製石鏃
20	"	208	石鏃	結晶片岩	2.4	1.3	0.3	1.2	磨製石鏃
21	"	266	スクレイパー	姫島産黒曜石	3.2	1.9	0.5	3.9	
22	"	一括	磨石	安山岩	11.0	9.0	2.2	320.5	片面使用
23	"	一括	磨石	安山岩	12.8	6.0	3.4	457.0	片面使用
24	"	一括	凹石	安山岩	10.8	8.6	3.4	454.8	片面使用
25	"	3	凹石	凝灰岩	9.6	5.0	5.1	213.7	両面使用

## 土器

溝状遺構2から出土した土器は第11図から第14図に示した。

### 縄文時代 (62~68 102~112)

62・63は精製の浅鉢。62は口縁部に鱗状の突起が付く。口縁部は大きく開き端部を丸く仕上げる。外面は口縁直下に沈線を1条施す。63は粗製の浅鉢で、胴部の屈曲部から「く」の字状の口縁部が付く。屈曲部の稜は明瞭である。64は深鉢で、口縁部はやや内傾気味に立ち上がりながら端部で若干外反する。口縁部直下に刻目突帯が1条巡らされている。65はほぼ直立する口縁部にあまり高さのない無刻目突帯を1条施す。66・67は深鉢の胴部で共に屈曲部より上の部位である。66は屈曲部から緩やかなカーブを描きながら外反するものである。67は貝殻条痕を施した後にヘラ状工具で2~3条の平行する沈線を施すものである。68は鉢で、口縁部が短く外反し、やや肩の張る胴部へと続く。口縁下にはほぼ平行して2カ所穿孔されている。102~104、108は浅鉢の底部である。薄手の底部に粘土帯を巡らすもので台形状に立ち上がる。105~107、109~112は深鉢の底部である。

### 弥生時代 (69~101 113~144)

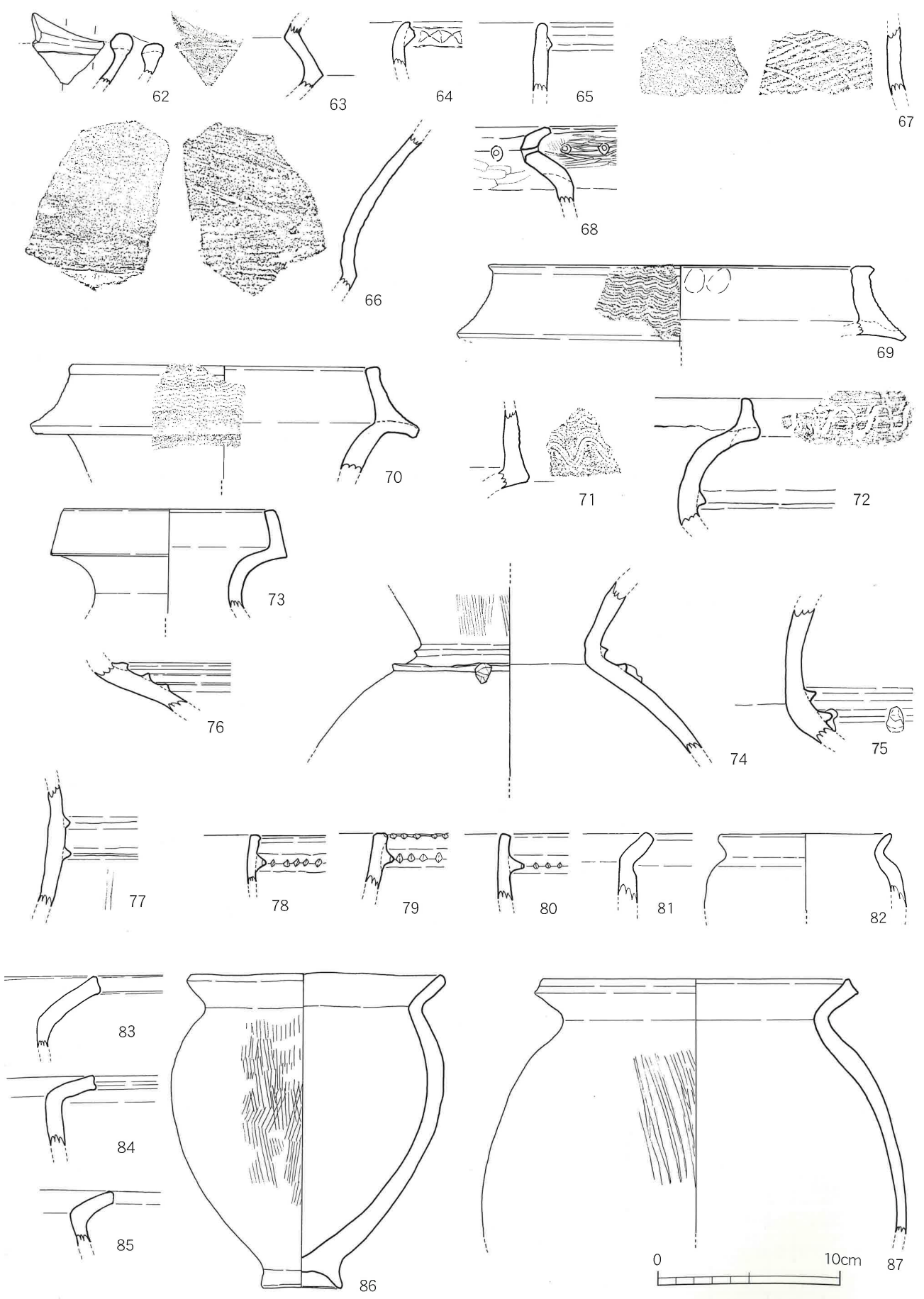
69~77および87・89・90は壺である。このうち69~77はすべて二重口縁の壺である。69・70は口縁部が大きく内傾して立ち上がるもので、屈曲部の先端部分は下がり気味である。71は、ほぼ直立して口縁部が立ち上がるものである。いずれも口縁部外面に櫛描波状文が施されている。72・73は頸部がやや縮まり、短い口縁部がわずかに内傾して立ち上がるものである。72は頸部に断面三角形の突帯が巡る。口縁部外面にはヘラ状工具による波状文が施される。73は文様を施さない。74・75は頸部でいったん強めに縮まりその後朝顔状に開く。頸部から胴部最上位に2条の断面三角形の突帯が巡り勾玉状の装飾を施す。

76は胴部最上位の部分で3条の突帯が巡る。77は胴部最大径付近の破片で、2条の断面三角形突帯が巡る。87は胴部が大きく張り「く」の字状の口縁部が付く。口縁端部はつまみあげられている。89は頸部の締まりがなく緩やかに外反する口縁部を持つ。口縁端部は丸く仕上げられている。90は「く」の字状の口縁部が付く壺である。外面は非常に荒いハケを施す。78～86、88・91は甕である。このうち78～80はいわゆる下城式土器の範疇に属するもので、ほぼ直行する口縁部に刻目を施した突帯を巡らすものである。79は口唇部にも刻目を施している。81・82はあまり張りの無い胴部から短く外反する口縁部をもつものである。83～85は「く」の字状に外反する口縁部で、端部をややつまみあげている。86は「く」の字状に外反する口縁部と最大径が上半部にくる胴部をもつ。底部は強い上げ底で台形状に開く。88は長胴形の胴部に朝顔状に外反する長い口縁部を持つ。91は小型の甕で、胴部上半部に最大径がある。底部は上げ底である。92・93、95・96は鉢である。92は脚が付く可能性もあり、胴部は朝顔状に開く。最大径に至る部分からやや内湾して口縁部となる。口縁端部は平坦に仕上げる。内外面ともヘラミガキを施して丁寧に仕上げる。93は口縁部がわずかに内湾する。95はやや小振りな鉢で、外面は丁寧なヘラミガキを施す。外面は丹塗りされている。96は胴部の形態は92とほぼ同じだが口縁部が弱い屈曲を持ち外湾する。94は蓋で、端部を若干つまみ出したものである。97は器台、98～99は高坏である。裾部はラッパ状に開くがそれほど大きくは開かない。100・101は小型丸底壺である。共にやや扁平気味の小振りな体部に大きく開く口縁部が伸びるものである。113～129は壺の底部と思われる。すべて平底である。130～143は甕の底部と思われる。A－平底には直径の大きいものとB－小さいものの2種類、C－上げ底を呈するもの、D－高台状の作りをしたもの、E－丸底に分けられる。Aは130、133、Bは139、141～143、Cは131・132、134～137、Dは138、Eは140である。144は鉢の底部と思われ、高台状の作りである。

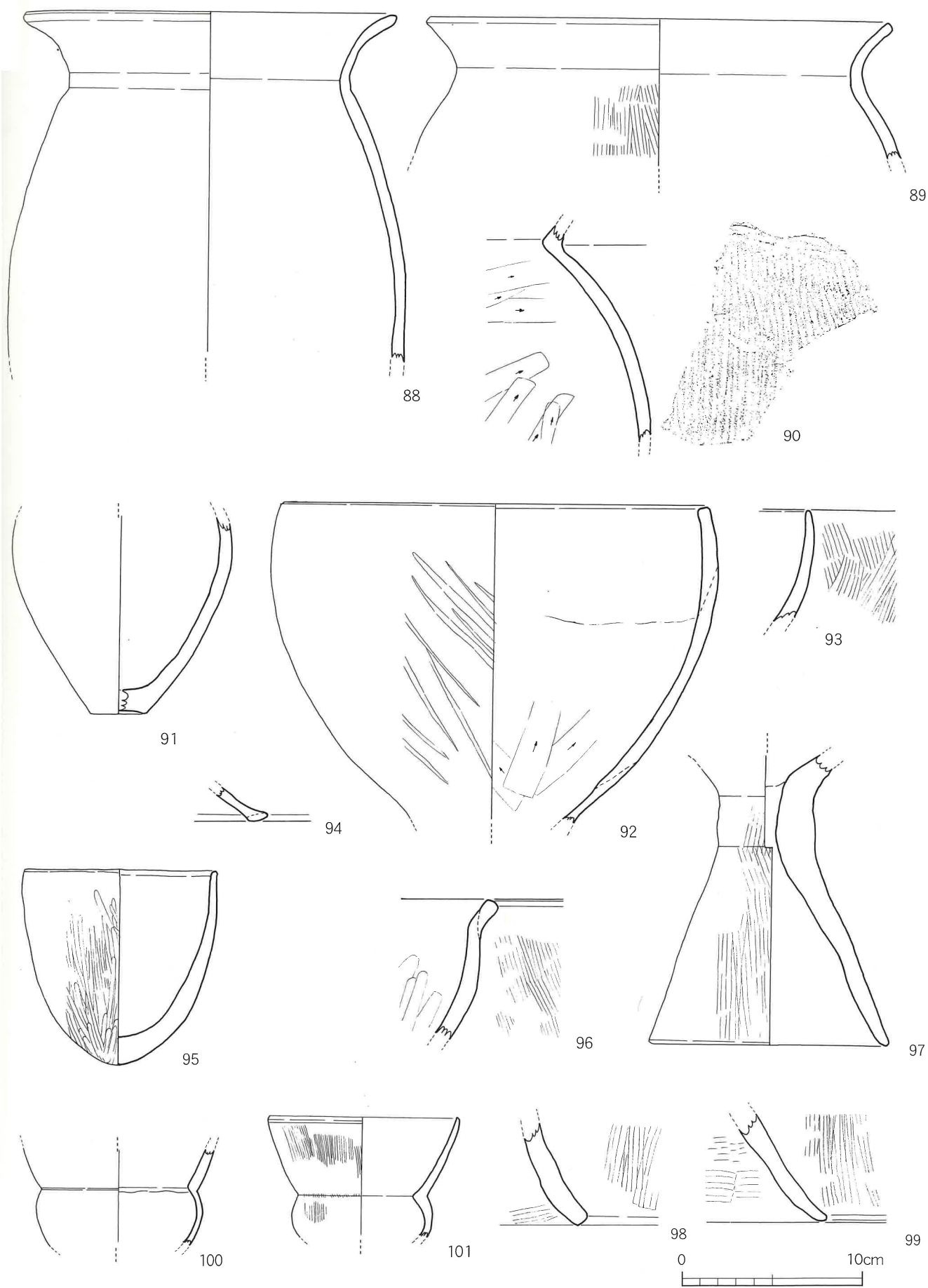
以上、溝状遺構2から出土した土器は62～67、102～112を代表とする縄文時代晩期後葉、78～80の下城式土器を代表とする弥生時代中期初頭、69や70などの二重口縁壺を代表とする弥生時代後期後葉、さらに100・101の小型丸底壺を代表とする古墳時代初頭の4時期に分けられる。出土量からは溝状遺構1と同様、弥生時代後期後葉の遺物が最も多い。

表5 溝状遺構2出土土器観察表(1)

挿図番号	出土地点	遺物番号	器種	胎土	色調		調整		法量(cm)				施文等
					内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径	
11図62	溝状遺構2	一括	浅鉢	角閃 金雲	黒褐色	黒褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ					鱗状突起 沈線1条
63	"	304	"	"	"	灰褐色	平滑ナデ	ナデ					黒斑あり
64	"	一括	深鉢	角閃 長	淡黄色	淡黄色	ナデ	"					刻目突帯
65	"	1	"	"	"	"	"	"					無刻目突帯
66	"	332	"	"	鈍い黄橙	鈍い黄橙	ナデ 貝殻条痕	貝殻条痕					黒斑あり
67	"	358	"	角閃 長 石英 金雲	"	"	ナデ	貝殻条痕 沈線					
68	"	241	鉢	角閃 長	黒褐色	赤褐色	ナデ ミガキ	ハケ ミガキ					穿孔あり
69	"	一括	壺	角閃 長 石英 金雲	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	櫛描波状文	21.4				
70	"	"	"	角閃 長 金雲	淡黄色	淡黄色	ナデ	"	17.0				
71	"	"	"	角閃 長	鈍い橙	鈍い橙	"	"					
72	"	278	"	"	橙色	橙色	"	"					頭部三角突帯1条
73	"	42,330	"	角閃 長 金雲	浅黄橙	浅黄橙	"	ナデ	11.6				
74	"	64, 65	"	"	"	"	"	"					勾玉状の装飾
75	"	433	"	角閃 長	"	"	"	"					"
76	"	113	"	"	淡黄色	淡黄色	"	"					三角突帯3条
77	"	294	"	角閃 長 金雲	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ					三角突帯2条
78	"	一括	甕	"	鈍い橙	鈍い橙	"	"					三角突帯2条
79	"	"	"	角閃 長 石英 金雲	灰白色	灰白色	"	"					刻目突帯
80	"	119	"	角閃 長 金雲	黄橙	黄橙	"	"					口唇部刻目 刻目突帯

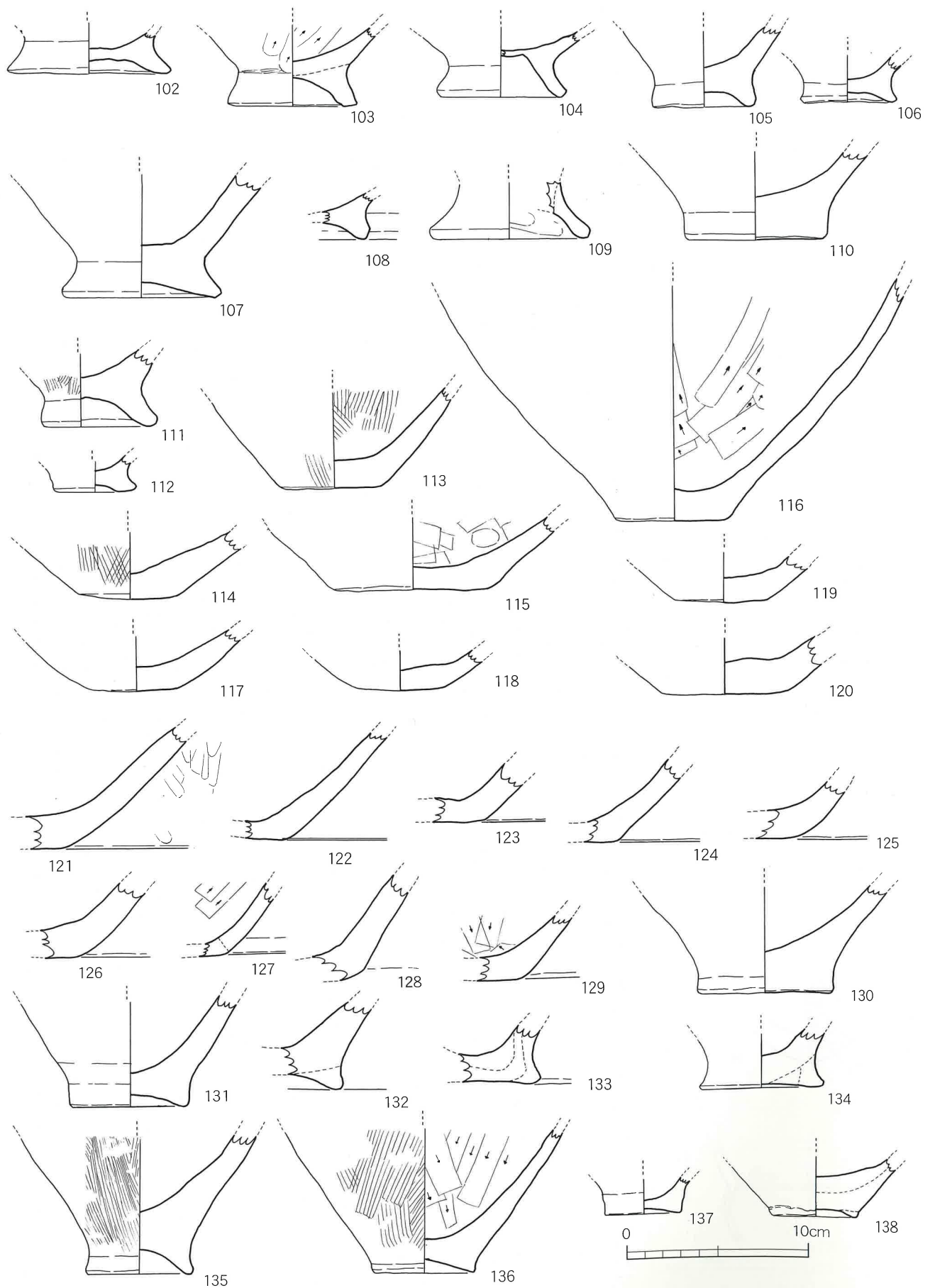


第11图 沟状遺構2出土土器実測図(1)

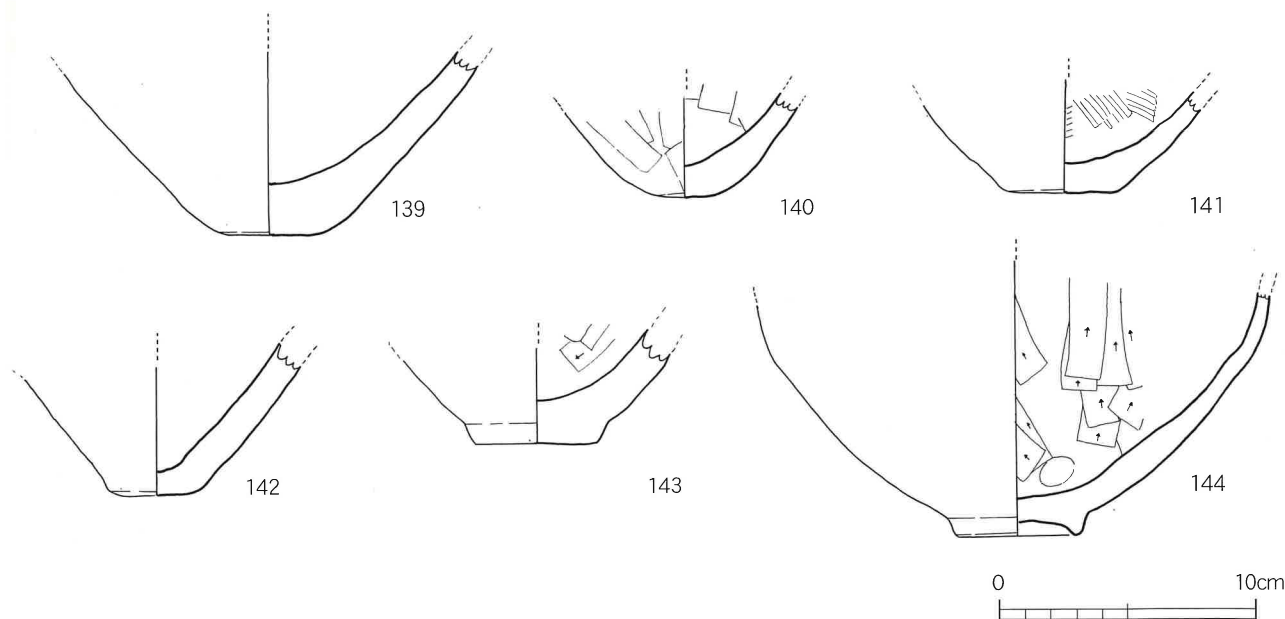


第12図 溝状遺構 2 出土土器実測図 (2)





第13图 溝状遺構2出土土器実測図(3)



第14図 溝状遺構2出土土器実測図(4)

表6 溝状遺構2出土土器観察表(2)

挿図番号	出土地点	遺物番号	器種	胎土	色調		調整		法量(cm)				施文等
					内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径	
11図81	溝状遺構2	354	甕	角閃長金雲	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ					刻目突帯
82	"	39	"	"	赤褐色	赤褐色	"	"	9.7				如意状口縁
83	"	295	"	角閃長	浅黄橙	浅黄橙	"	"					
84	"	385	"	角閃長金雲	灰黄褐色	灰黄褐色	"	"					
85	"	387	"	角閃長	浅黄橙	浅黄橙	"	"					
86	"	321	"	角閃長金雲	浅黄色	浅黄色	"	"	14.0	17.3	15.2	4.2	スス附着
87	"	350.500	壺	角閃長	鈍い褐	鈍い褐	"	ナデ ミガキ	17.0		23.8		
12図88	"	12.279	甕	角閃長金雲	浅黄橙	浅黄橙	"	ナデ	21.0		22.8		黒斑あり
89	"	331一括	壺	角閃長	鈍い黄橙	鈍い黄橙	"	ナデ タテハケ	26.2				黒斑あり
90	"	347一括	"	"	"	鈍い褐	ナデ ケズリ	荒いハケ					
91	"	417	甕	"	灰黄色	灰黄色	ナデ	ナデ			12.6	2.9	赤変 黒斑あり
92	"	59.314	鉢	角閃長石英金雲	浅黄橙	浅黄橙	ナデ ケズリ	ナデ ミガキ	23.8				内面に黒斑
93	"	一括	"	角閃長金雲	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色	ナデ	ナデ タテハケ				13.4	
94	"	11	蓋	角閃長	浅黄橙	浅黄橙	"	ナデ					
95	"	261.361	鉢	角閃長金雲	"	赤褐色	"	ナデ ハケ ミガキ	10.8	10.9	10.4		赤彩あり
96	"	343	"	角閃長	鈍い橙	黒褐色	ヘラケズリ	タテハケ					
97	"	85.210	器台	角閃長石英金雲	灰黄色	灰黄色	ナデ	"					
98	"	301	高坏	角閃長	鈍い黄橙	鈍い黄橙	ナデ ヨコハケ	ナデ タテハケ					
99	"	315	"	角閃長金雲	"	"	ヨコハケ	タテハケ					赤変あり
100	"	2	小型丸底壺	角閃長	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ			9.4		黒斑あり
101	"	一括	"	角閃長金雲	浅黄橙	浅黄橙	"	タテハケ	10.6		8.0		
13図102	"	453	浅鉢	"	鈍い黄橙	鈍い黄橙	"	ナデ				9.0	
103	"	148	"	角閃長石英	黒褐色	黄橙	ヘラケズリ	ナデ ケズリ				7.2	
104	"	12	"	角閃長石英金雲	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ				7.2	黒斑あり
105	"	425	深鉢	角閃長	明黄褐色	明黄褐色	"	"				6.6	
106	"	199	"	角閃長金雲	鈍い黄橙	鈍い黄橙	"	"				5.4	
107	"	346	"	"	"	"	"	"				4.8	
108	"	296	浅鉢	角閃長	淡黄色	淡黄色	"	"				7.8	
109	"	399	深鉢	"	浅黄橙	浅黄橙	ナデ ケズリ	"				8.4	
110	"	295	"	"	淡黄色	淡黄色	ナデ	"				7.8	赤変あり

表7 溝状遺構2出土土器観察表(3)

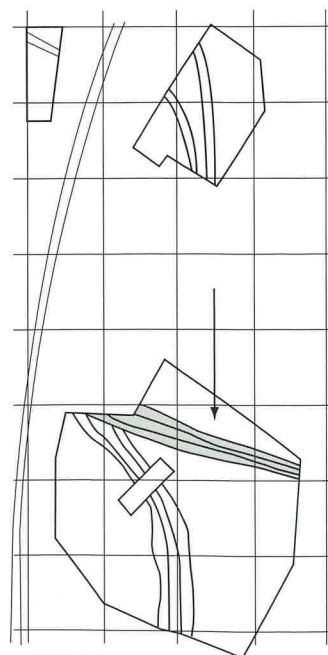
挿図番号	出土地点	遺物番号	器種	胎土	色調		調整		法量(cm)				施文等	
					内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径		
13図111	溝状遺構2	389	深鉢	角閃長	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	タテハケ				6.8	
112	"	478	"	角閃長 石英 金雲	浅黄橙	橙色	"	ナデ					4.6	
113	"	335	壺	角閃長 金雲	"	浅黄橙	タテハケ	ナデ	タテハケ				5.2	
114	"	一括	"	角閃長	"	"	不明	ナデ	タテハケ				5.5	
115	"	"	"	"	"	"	ヘラケズリ	ナデ					9	黒斑あり
116	"	333	"	角閃長 金雲	鈍い黄橙	鈍い黄橙	"	"					6.2	
117	"	25	"	"	淡黄橙	灰白色	ナデ	"					4.6	
118	"	250	"	角閃長	浅黄橙	橙色	"	"					4.6	
119	"	97	"	角閃長 金雲	"	浅黄橙	不明	"					5.6	
120	"	5	"	角閃長	"	"	ナデ	"					7.5	
121	"	448	"	角閃長 金雲	浅黄色	浅黄色	"	ナデ	ミガキ					
122	"	384	"	角閃長 石英 金雲	淡黄色	淡黄色	"	ナデ						
123	"	56	"	角閃長 石英	灰黄褐色	灰黄褐色	"	"						
124	"	154	"	角閃長	鈍い黄橙	浅黄橙	"	"						
125	"	9	"	"	"	鈍い黄橙	"	不明						
126	"	197	"	角閃長 石英	褐色	褐色	"	ナデ						
127	"	420	"	"	橙色	橙色	"	"						
128	"	137	"	角閃長 金雲	浅黄橙	浅黄橙	"	"						
129	"	一括	"	"	"	"	"							
130	"	301	甕	角閃長 石英 金雲	灰白色	灰白色	"	ナデ						
131	"	408 一括	"	"	鈍い黄橙	鈍い黄橙	"	"						
132	"	一括	"	角閃長	"	橙色	"	"						
133	"	370	"	角閃長	浅黄橙	浅黄橙	"	"						二次焼成あり
134	"	371	"	角閃長 金雲	"	"	"	"					6.9	
135	"	450	"	角閃長 石英	褐灰色	褐灰色	"	"					6	
136	"	409	"	角閃長 金雲	浅黄橙	"	ヘラケズリ	ナデ	タテハケ				5.8	
137	"	1	"	"	褐灰色	褐灰色	ナデ	ナデ					4.4	
138	"	一括	"	角閃長 石英	浅黄橙	"	"	"					4.8	
14図139	"	391	"	角閃長 金雲	鈍い黄橙	鈍い黄橙	"	"					3.9	
140	"	388	"	角閃長	灰黄色	灰黄色	ヘラケズリ	ナデ	ケズリ				1.6	
141	"	422	"	角閃長 石英 金雲	黄橙	鈍い黄橙	ハケ	ナデ					4.4	
142	"	262	"	"	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	"					3.6	
143	"	394	"	角閃長 金雲	黒色	鈍い黄橙	ナデ	ケズリ	"				5	
144	"	48	鉢	"	赤褐色	褐灰色	ヘラケズリ	"					5	赤彩あり

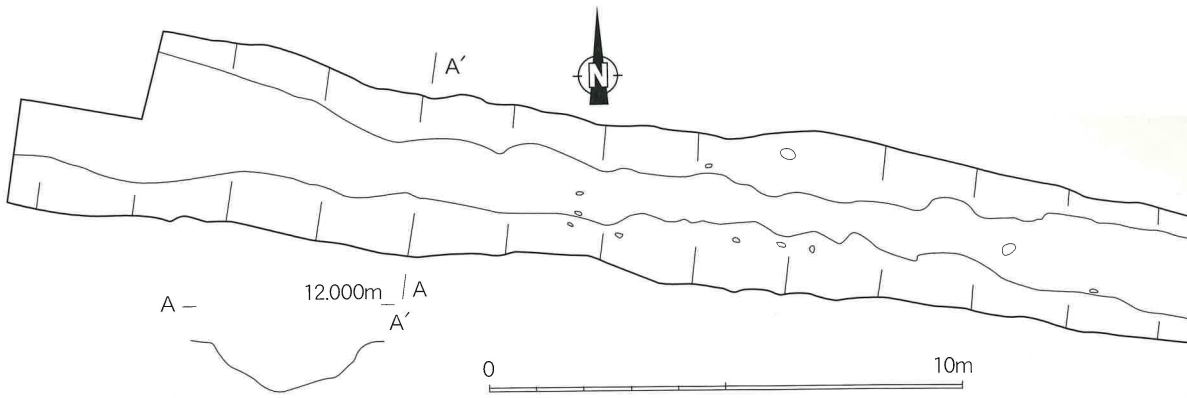
### 3) 溝1

溝1はA-7~C-7グリッドで確認された。ほぼ東西方向に約26m、幅は2.4mから4mで深さは1mを測る。断面は逆蒲鉾状である。土層観察では2層の埋土が確認された。

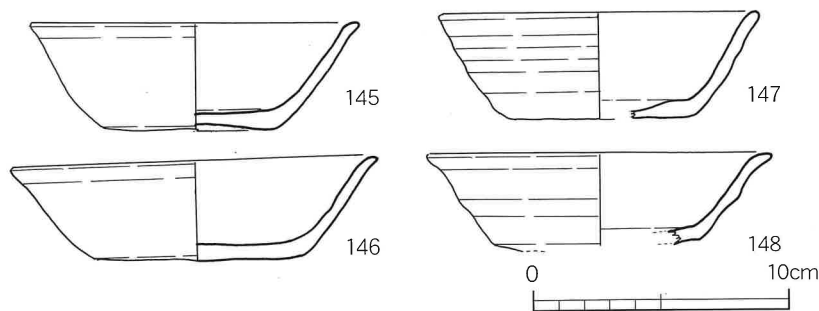
#### 出土遺物

溝1から出土した遺物は第16図に示した遺物のほかは細片がわずかに出土したにとどまった。145~148は土師器の坏で、145は口径が13.0cmで器高4.3cm、底部は中央部分がやや薄く上げ底気味の作りで、ヘラ切離しである。体部はあまり広がらずに立ち上がる。口縁端部は若干外側につまみ出されている。146は口径12.6cm、器高4cm、底部はヘラ切り離しである。147は口径13.6cm、器高4.2cmで底部はヘラ切り後ナデている。口縁端部を外側につまみ出す。148は復元口径が13.4cm、器高4cmで、底部は不明である。体部はあまり広がらず口縁端部を外反させる。





第15図 溝1 実測図



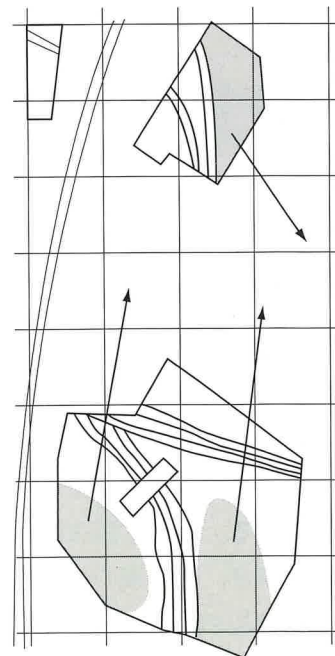
第16図 溝1 出土土器実測図

#### 4) 包含層

包含層は調査区の全面で確認され、遺物の出土状況は第17図に示したような分布であった。特に集中して遺物が出土したのはB-2グリッド、C-9グリッド、D-9グリッドである。また遺構は、B-2グリッドでピットがわずかに確認されたのみである。この包含層の時期は、出土した土器や石鏃の形態から縄文時代晩期後半のものが主体となるものと考えられる。

#### 石器

包含層から出土した石器は第18図～第19図に示している。26～28は石鏃である。いずれも平基式の石鏃で、26は姫島産黒曜石を用い、肩部に段を持つ平面五角形の鏃である。27・28の平面形はほぼ同じで両側縁部がわずかに弧を描き先端部分へと続くものである。27はサヌカイト、28は結晶片岩を用いている。29は姫島産黒曜石を用いて、基部は平坦で体部は中位まで厚みを持たせ先端部分にかけて大きく加工を施している。その形態からドリルとして用いられたものと思われる。30～34は二次加工剥片である。30は姫島産黒曜石を用い、縦長剥片の一部分に二次加工を施したものであろう。31は漆黒色の黒曜石を用い、縦長剥片の一部分を刃部としたものである。32は姫島産黒曜石を用い、縦長剥片の一部に二次加工を施したものである。33・34はともにサヌカイトの横長剥片を用いて、その一部に二次加工を施したものである。35は一応石核としたが、石材が凝灰岩ということから、若干疑問符がつくものである。ただし打面調整の痕跡も認められ、剥片が採取された痕跡





も認められる。36～38は扁平打製石斧である。36は側縁部が直線的に伸びるもので刃部には使用痕がよく観察される。37は撥形に開くタイプで、片面に大きく自然面を残す。38は大部分を欠損しているため全体の姿をうかがい知ることにはできないが平面形は長楕円形になるタイプと思われる。36・37はヒン岩、38は片岩を用いている。39は磨製石斧である。長楕円形の平面観を持つ。横方向からのなんらかの打撃が加えられて、大部分が剥落している。40・41はともに磨石で安山岩の円礫を用いている。40は周縁部に敲打痕が残り両面を磨面としている。41は片面を磨石もう一面を敲石として利用している。42は石皿である。側縁部は荒い整形を加え略長方形にしている。

## 石材

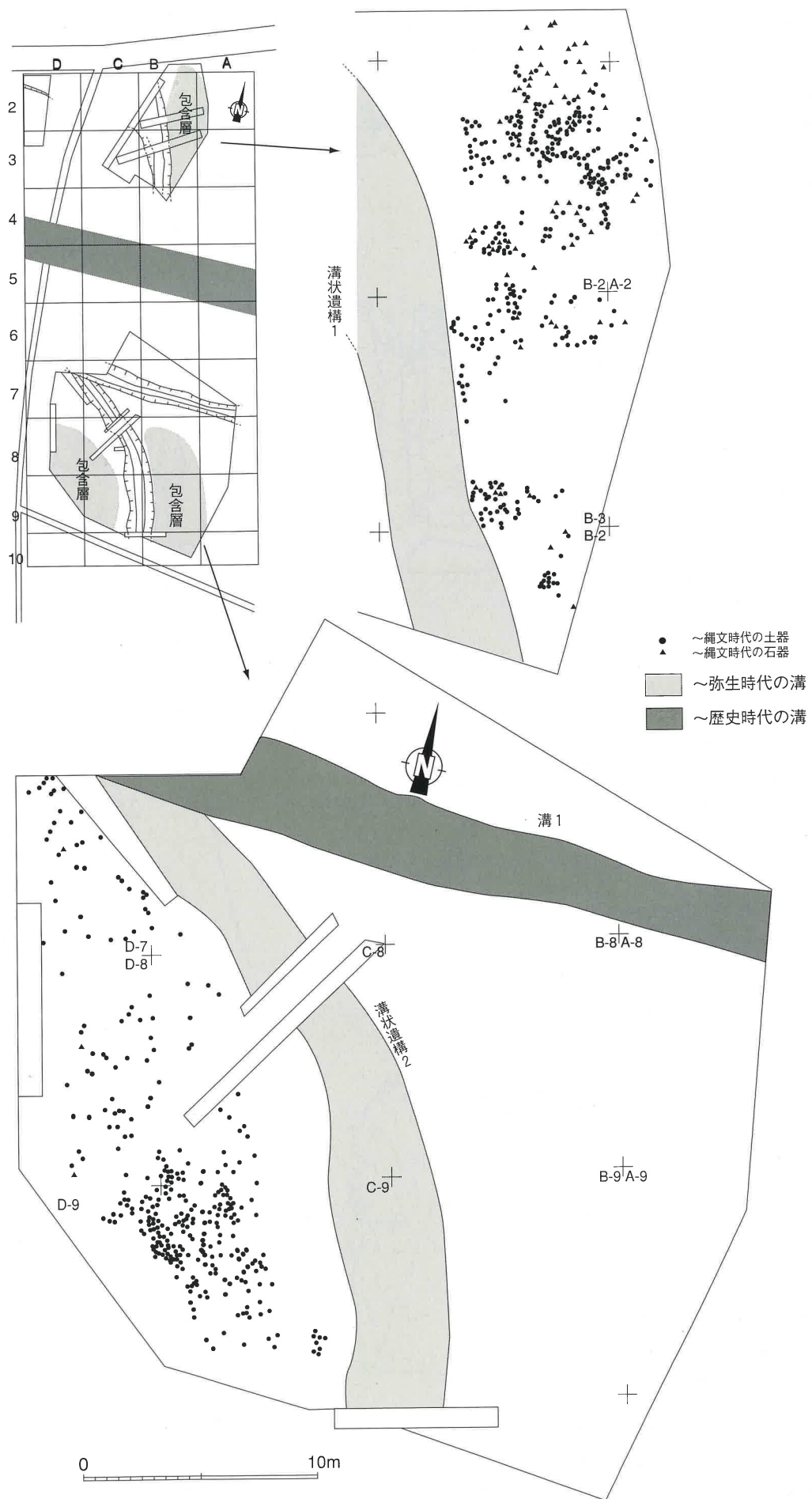
包含層から出土した石器の素材は表8に示したように姫島産黒曜石、西北九州産系の黒曜石、サヌカイト、安山岩、凝灰岩などが確認された。確認された数が多い順から並べると、姫島産黒曜石41%、安山岩27%、凝灰岩15%、サヌカイト9%などである。凝灰岩は調査区の後背部に岩肌が露頭していることから比較的大量に出土することはうかがえる。姫島産黒曜石の出土量は突出しているが、チャートなど同じく県内で比較的用意に入手することができる石材は全く見受けられなかった。

表8 包含層出土石器観察表

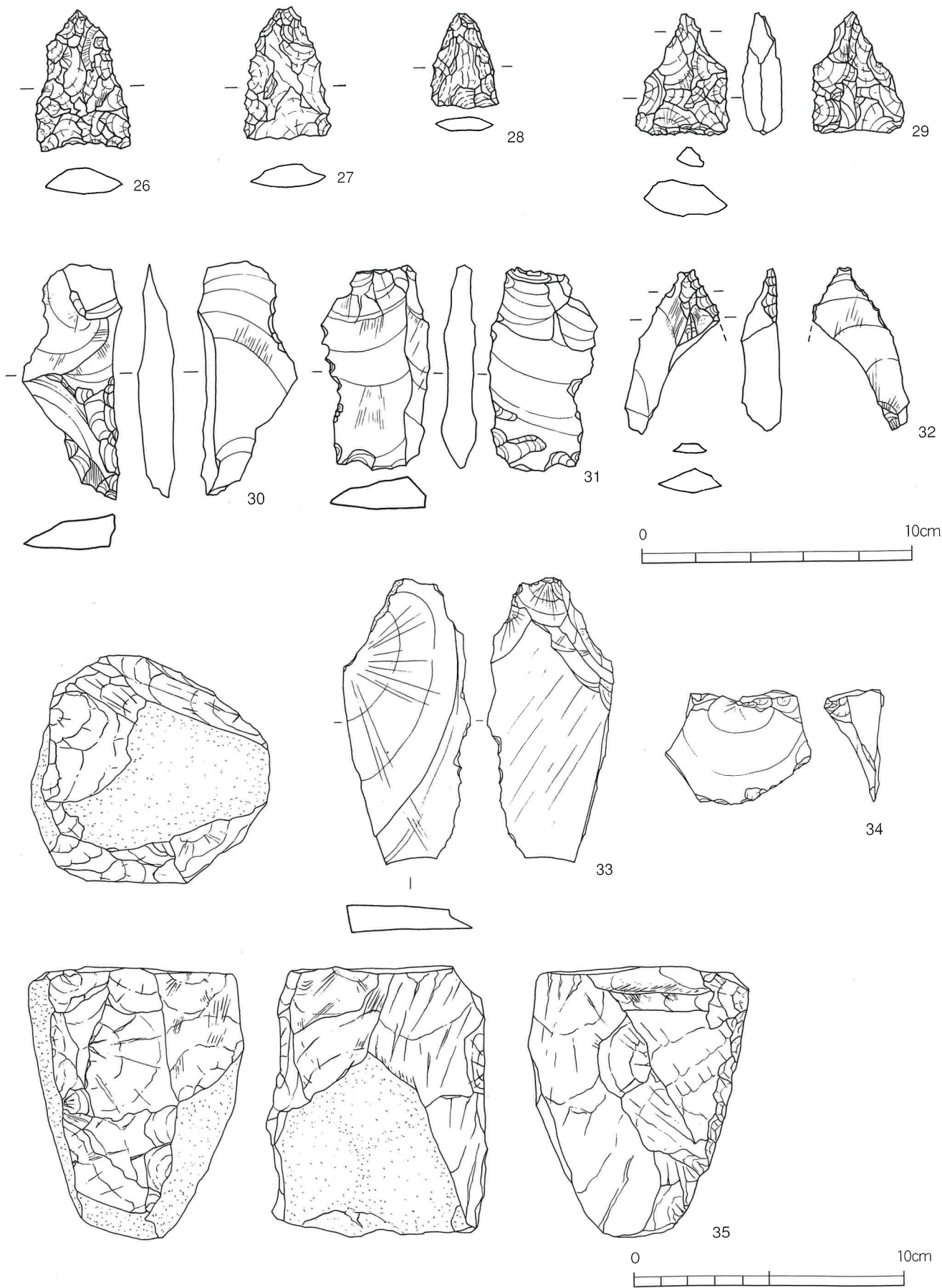
挿図番号	出土地点	遺物番号	種類	石材	法量 cm・g				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
18図26	包含層	一括	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.7	0.5	1.9	
27	B-3	53	石鏃	サヌカイト	2.4	1.5	0.4	1.9	
28	包含層	一括	石鏃	結晶片岩	1.7	1.2	0.2	0.7	
29	包含層	一括	ドリル	姫島産黒曜石	2.2	1.7	0.6	2.3	
30	B-3	51	二次加工剥片	姫島産黒曜石	4.3	1.7	0.5	4.0	
31	包含層	一括	二次加工剥片	黒曜石	3.6	2.0	0.6	4.2	
32	B-3	108	二次加工剥片	姫島産黒曜石	3.0	1.2	0.4	1.4	
33	B-4	1	二次加工剥片	サヌカイト	10.4	4.4	1.0	50.3	
34	B-2	278	二次加工剥片	サヌカイト	4.1	5.3	2.1	29.8	
35	B-3	110	石核?	凝灰岩	9.8	7.7	7.5	600.0	石材に疑問
19図36	包含層	一括	打製石斧	ヒン岩	10.2	4.0	1.3	69.6	基部欠
37	B-3	一括	打製石斧	ヒン岩	11.3	5.3	1.9	1555.5	一部に自然面
38	B-2	115	打製石斧	片岩	5.5	5.9	0.5	31.0	基部欠
39	包含層	一括	磨製石斧	ヒン岩	13.2	4.6	2.0	148.5	大部分剥落
40	B-3	73	磨石	安山岩	11.2	9.2	4.9	686.1	両面使用
41	B-2	126	磨石	安山岩	8.7	7.2	6.2	542.7	片面使用
42	B-3	486	石皿	安山岩	28.8	42.5	12.7	19000.0	

## 土器

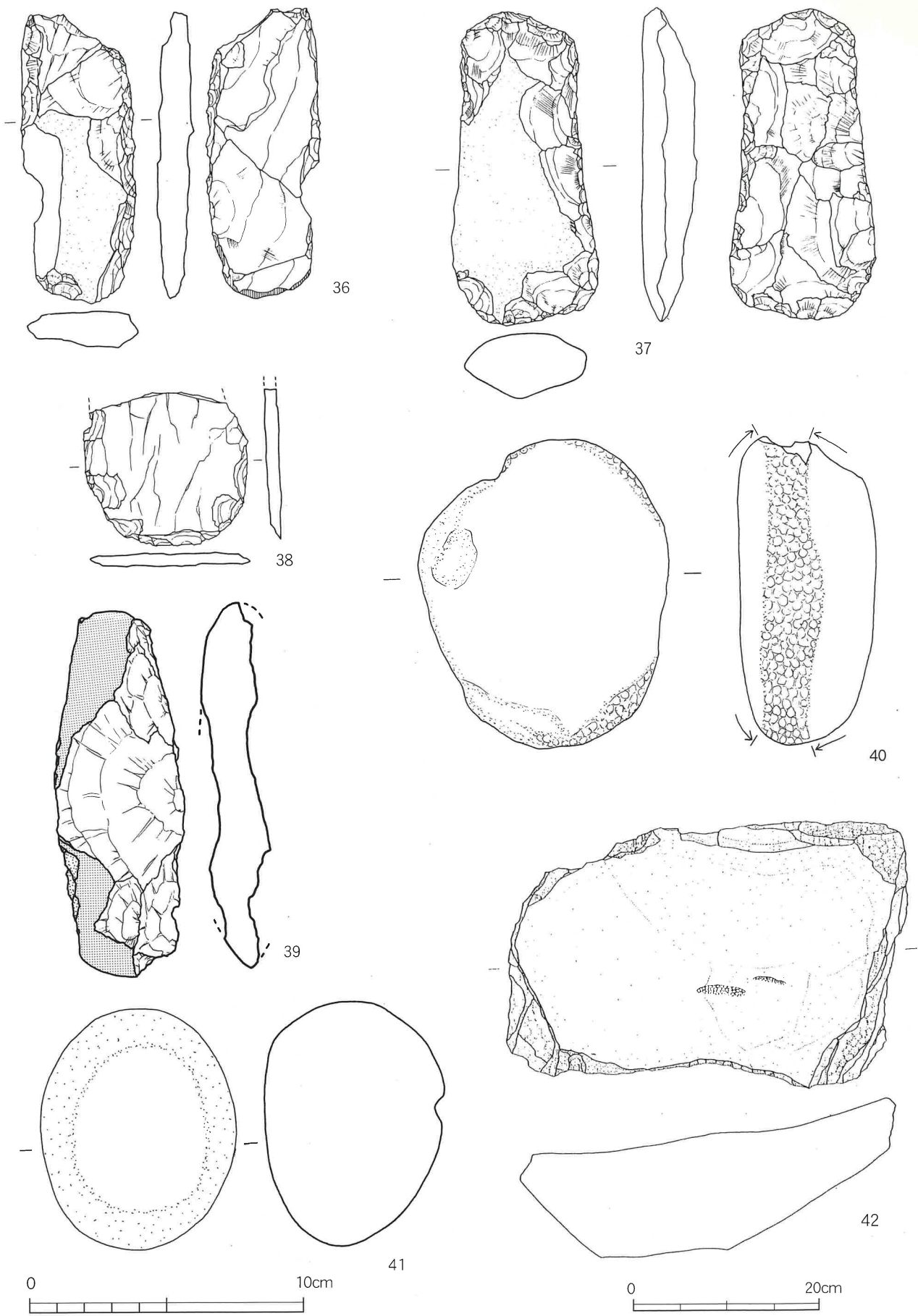
包含層から出土した土器は1000個を超える。しかしそのうち図化に耐えるものは約3分の1程度である。出土土器は粗製の深鉢が主体で、精製浅鉢、粗製浅鉢がそれに続く。それにわずかだが鉢、高坏、壺が混じる。これらは第20図～第27図に示した。深鉢や浅鉢の形態は、口縁部にリボン状突起や鱗状突起を付けるタイプ、口縁部が波状口縁を呈するタイプ。また口縁部内面が肥厚しながら伸び、さらにもう一段断面が球形の肥厚帯を付けるいわゆる鍵状口縁のタイプと、口縁部外面に無刻目突帯を巡らすタイプ、やや大きめの刻目を施した突帯を巡らすタイプに分けられる。さらに深鉢や浅鉢は突帯の有無や口縁部の形態差によって細分を行っている。このうち浅鉢は鍵状口縁が短く玉状に退化したものは非常に少なく、長く伸びるタイプが多い。深鉢では無刻目突帯が主体で刻目突帯は少ない。また口縁部につく鱗状突起もやや退化傾向にある。土器の分類については別表を参照していただきたい。



第17図 包含層出土遺物分布図



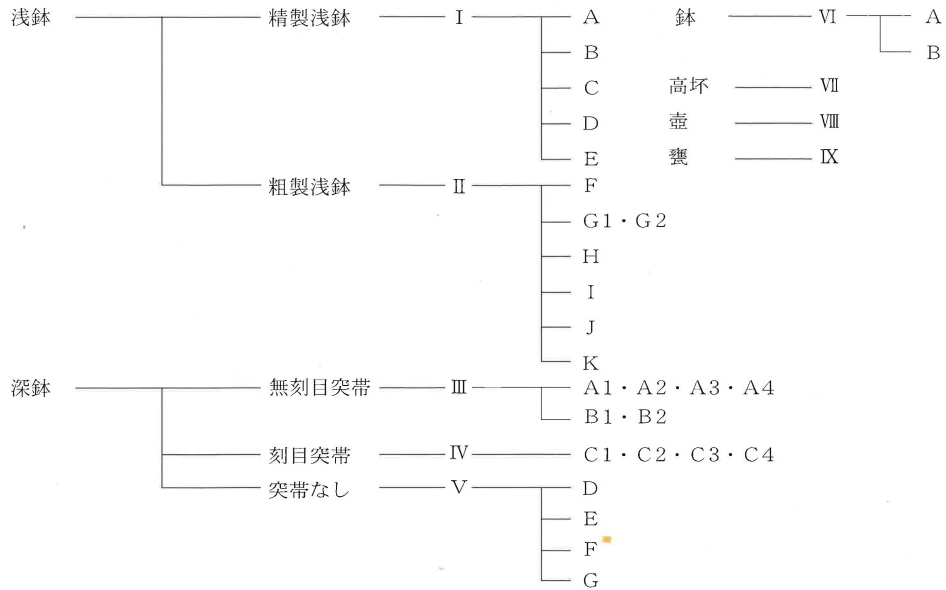
第18图 包含層出土石器实测图 (1)



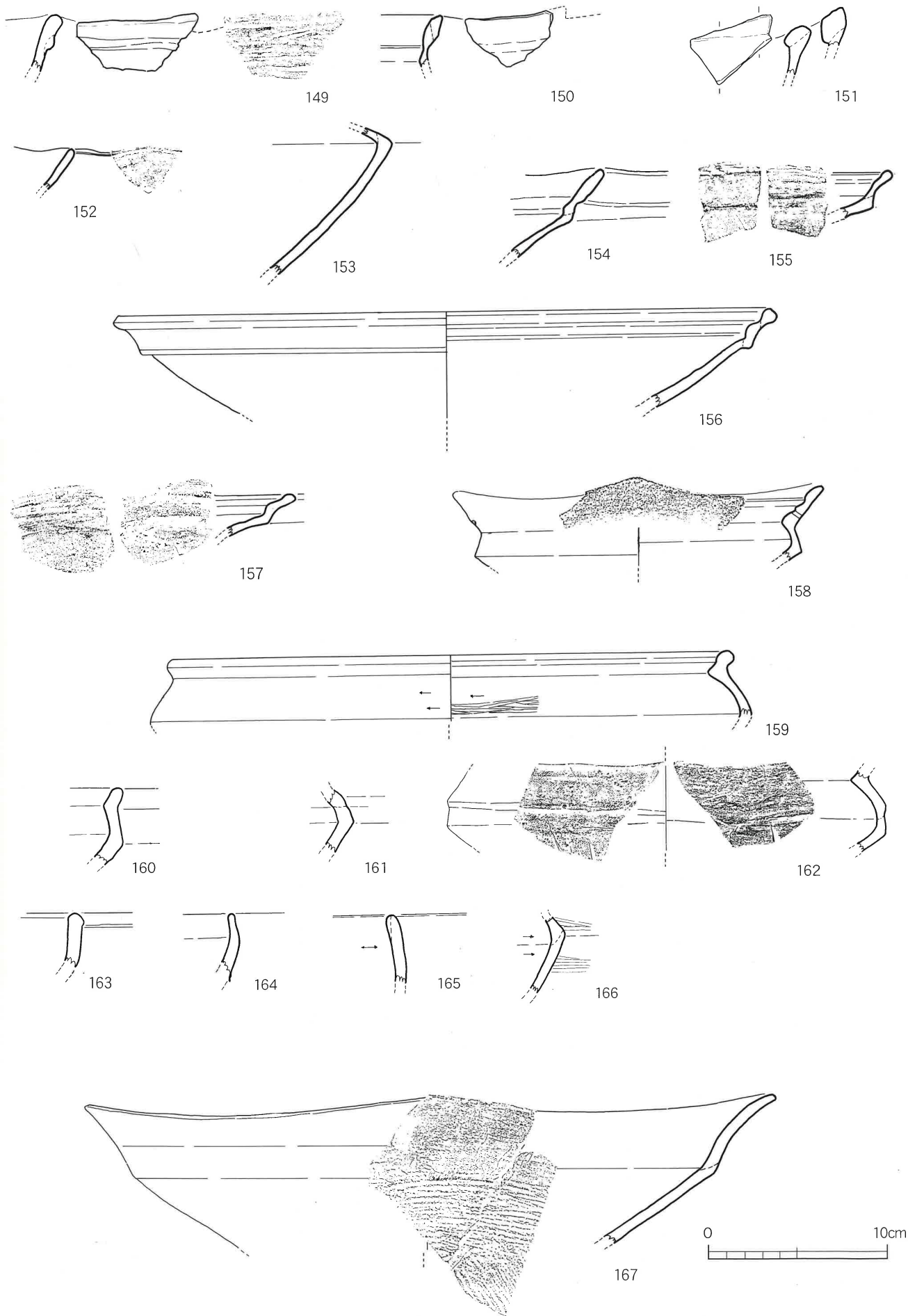
第19图 包含層出土石器実測図(2)



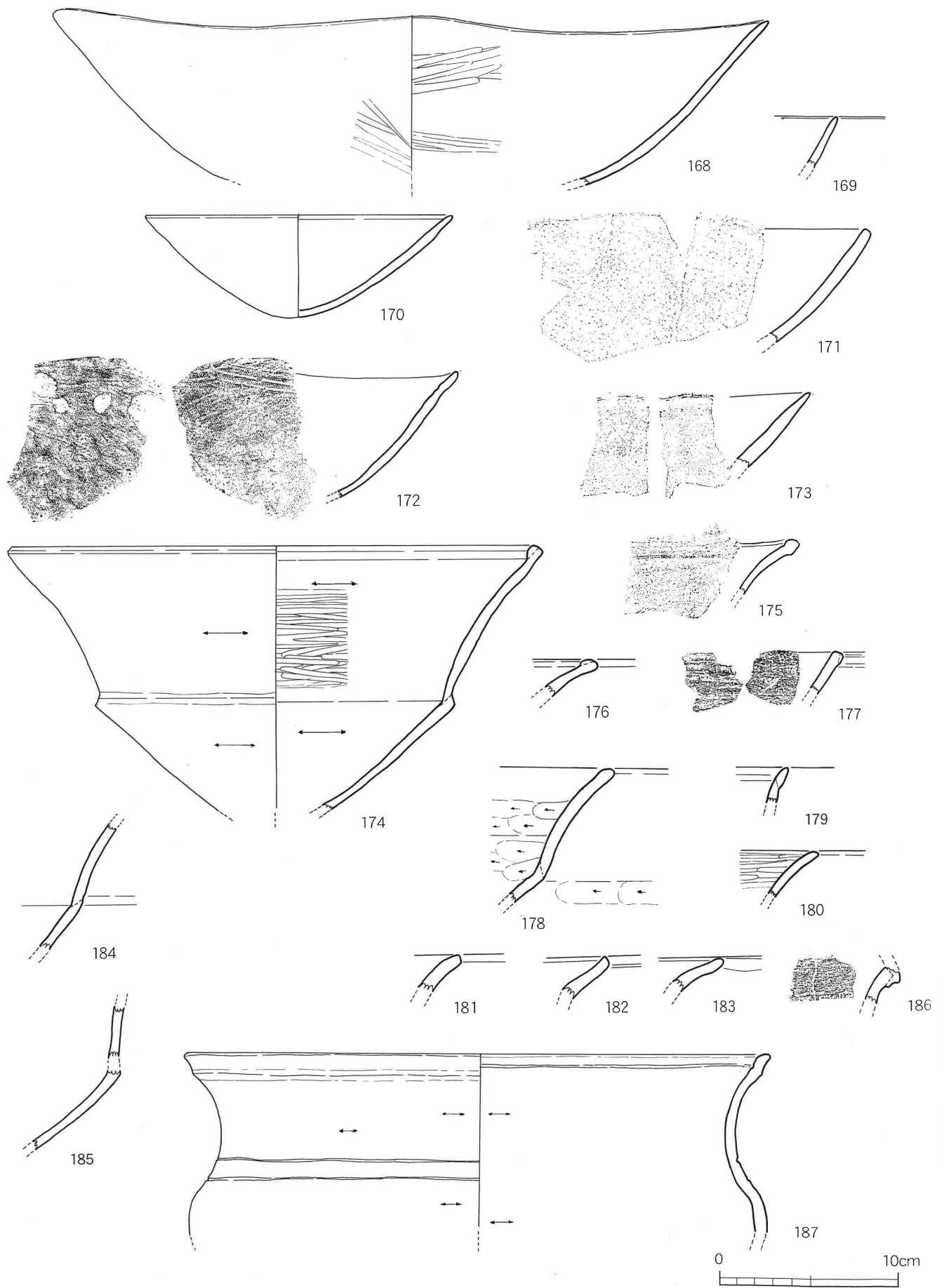
土器分類表



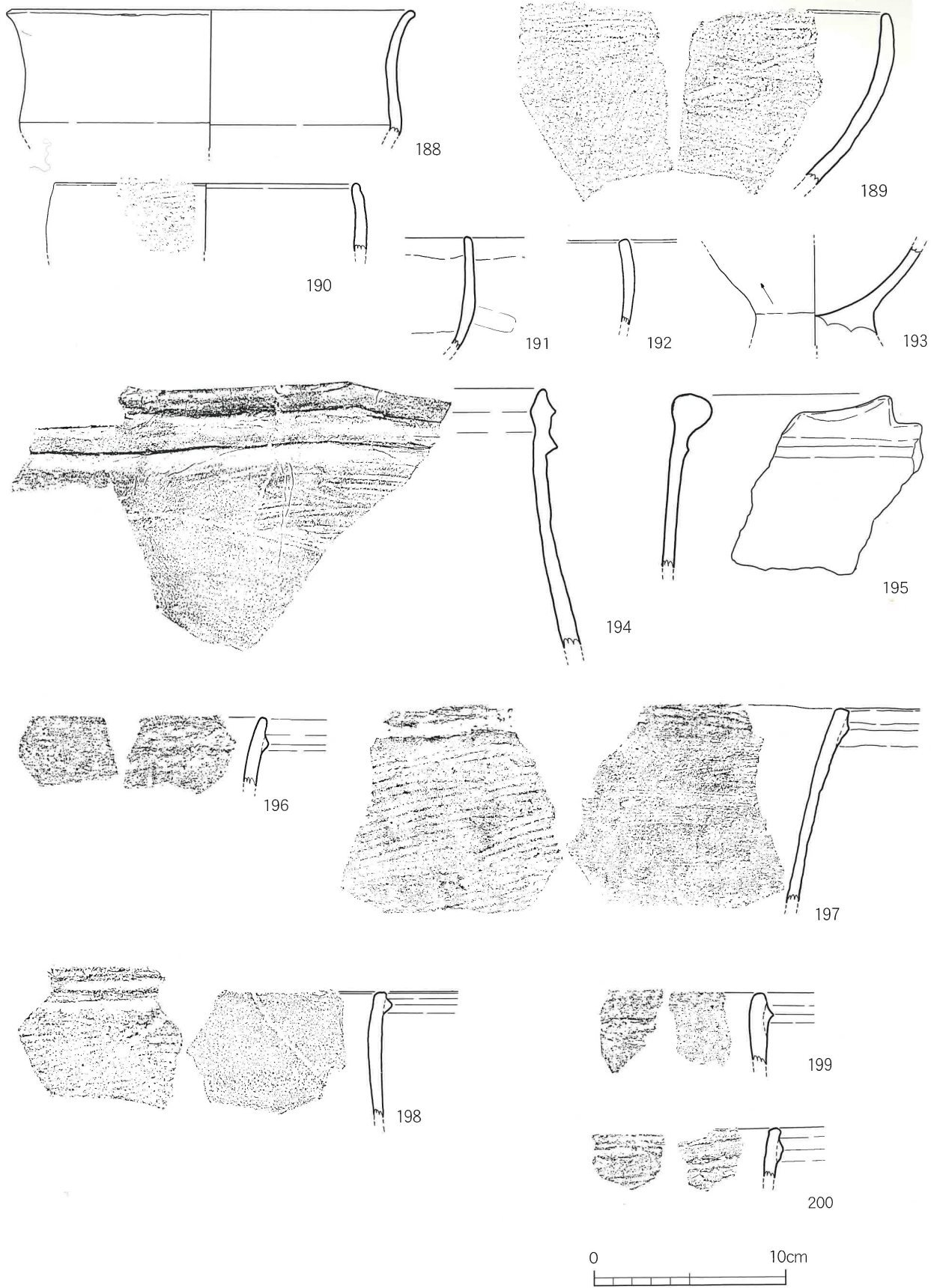
- [ I ] A 類 リボン状突起が口縁部に付く。
- B 類 胴部からシャープに内傾して口縁部に至るもの。
- C 類 胴部の屈曲部はシャープさに欠け、口縁部は短く玉状に肥厚するもの。
- D 類 波状口縁を呈し、朝顔状に大きく開くもの。
- E 類 鉢状の胴部にわずかに内湾し大きく伸びる口縁部が付くもの。
- [ II ] F 類 鱗状突起の付くもの。
- G 1 類 口縁部が長い鍵状口縁のもの。
- G 2 類 口縁部が短い鍵状口縁のもの。
- H 類 胴部の屈曲部はシャープさに欠け、口縁部は「く」の字状に外反する。
- I 類 朝顔状に開く胴部から屈曲部を経て内湾する口縁部が付くもの。
- J 類 底部は丸底で屈曲部は持たずに立ち上がるもの。
- K 類 鉢状の胴部にわずかに内湾し大きく伸びる口縁部が付くもの。
- [ III ] A 1 類 最大径が口縁部付近にあり、鱗状突起が付く。
- A 2 類 最大径が口縁部付近にあり、口縁部が内湾し端部を丸くするもの。
- A 3 類 最大径が口縁部付近にあり、口縁端部を丸く仕上げやや外反するもの。
- A 4 類 最大径が口縁部付近にあり、口縁部が直線的に外反するもの。
- A 5 類 最大径が口縁部付近にあり、口縁部に刻目を施すもの。
- B 1 類 最大径が胴部中位付近にあり、口縁部はほぼ直立し端部を丸く仕上げるもの。
- B 2 類 最大径が胴部中位付近にあり、口縁部はほぼ直立し端部を平坦に仕上げるもの。
- [ IV ] C 1 類 最大径が胴部上半部にあり、口縁部はやや外反する。突帯下に斜行沈線を施す。
- C 2 類 最大径が胴部上半部にあり、口縁部はやや外反し端部は丸く仕上げるもの。
- C 3 類 最大径が胴部上半部にあり、口縁部は直立気味のもの。
- C 4 類 最大径が胴部上半部にあり、口縁部は大きく内傾し端部は丸く仕上げるもの。
- [ V ] D 類 最大径は胴部中位にあり、直行する口縁部は屈曲部から内傾して立ち上がる。
- E 類 口縁部がやや内湾しながら立ち上がるもの。
- F 類 口縁部がほぼ直行して立ち上がるもの。
- G 類 口縁部が直立し、端部が外側につまみ出されたもの。
- [ VI ] A 類 胴部に屈曲部を持ち、直立気味の口縁部は端部で外反する。
- B 類 胴部に屈曲部はなく、直行する口縁部の端部がわずかに外反するもの。
- [ VII ] 浅鉢に脚をつけたもの。
- [ VIII ] 小型の壺でほぼ球形の胴部を持つ。手捏ねである。
- [ IX ] 直立する口縁部に細かい刻目を施した突帯を巡らすもので、下城式土器に含まれるもの。



第20图 包含層出土土器実測图 (1)

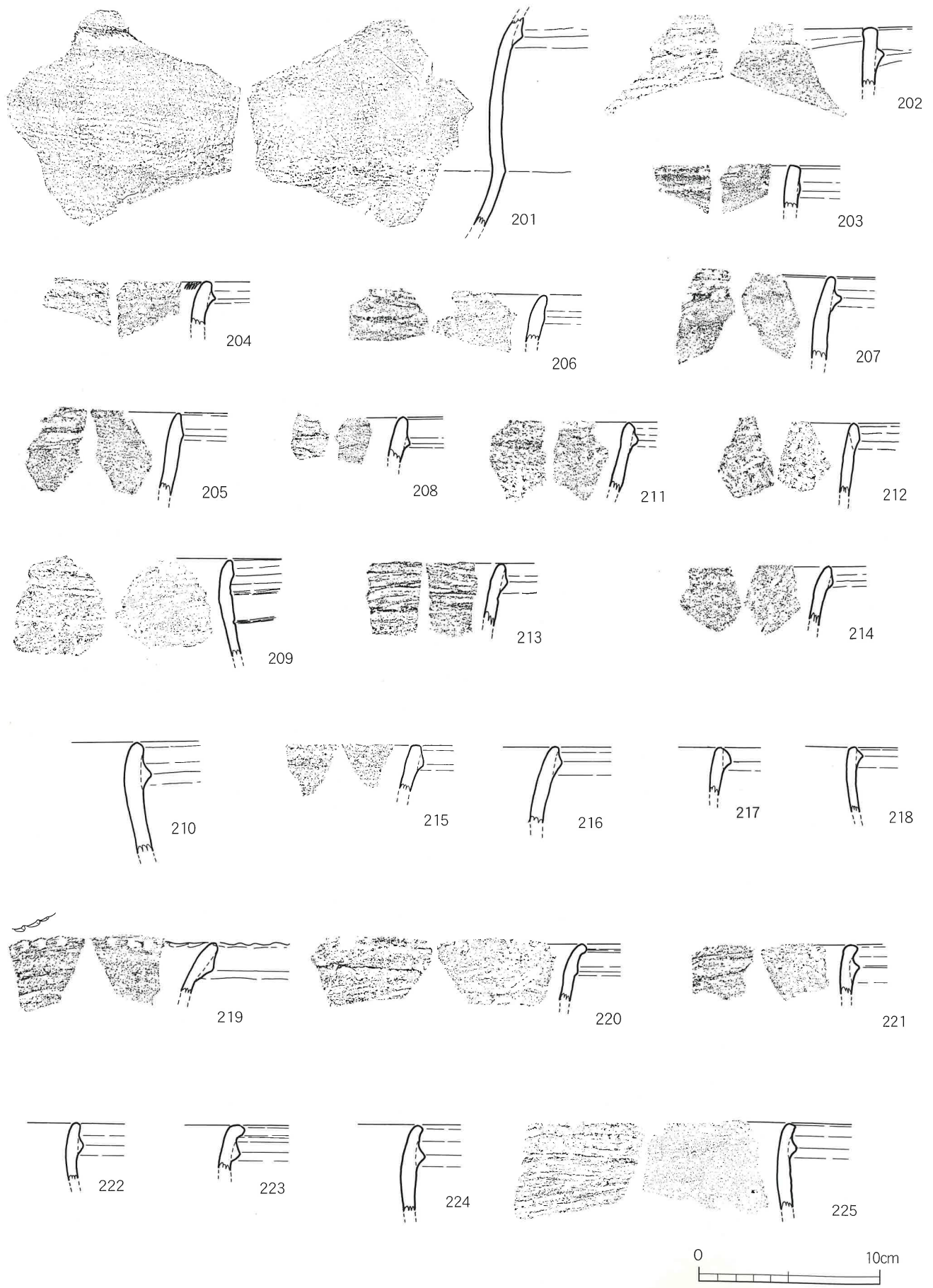


第21图 包含層出土土器実測图(2)

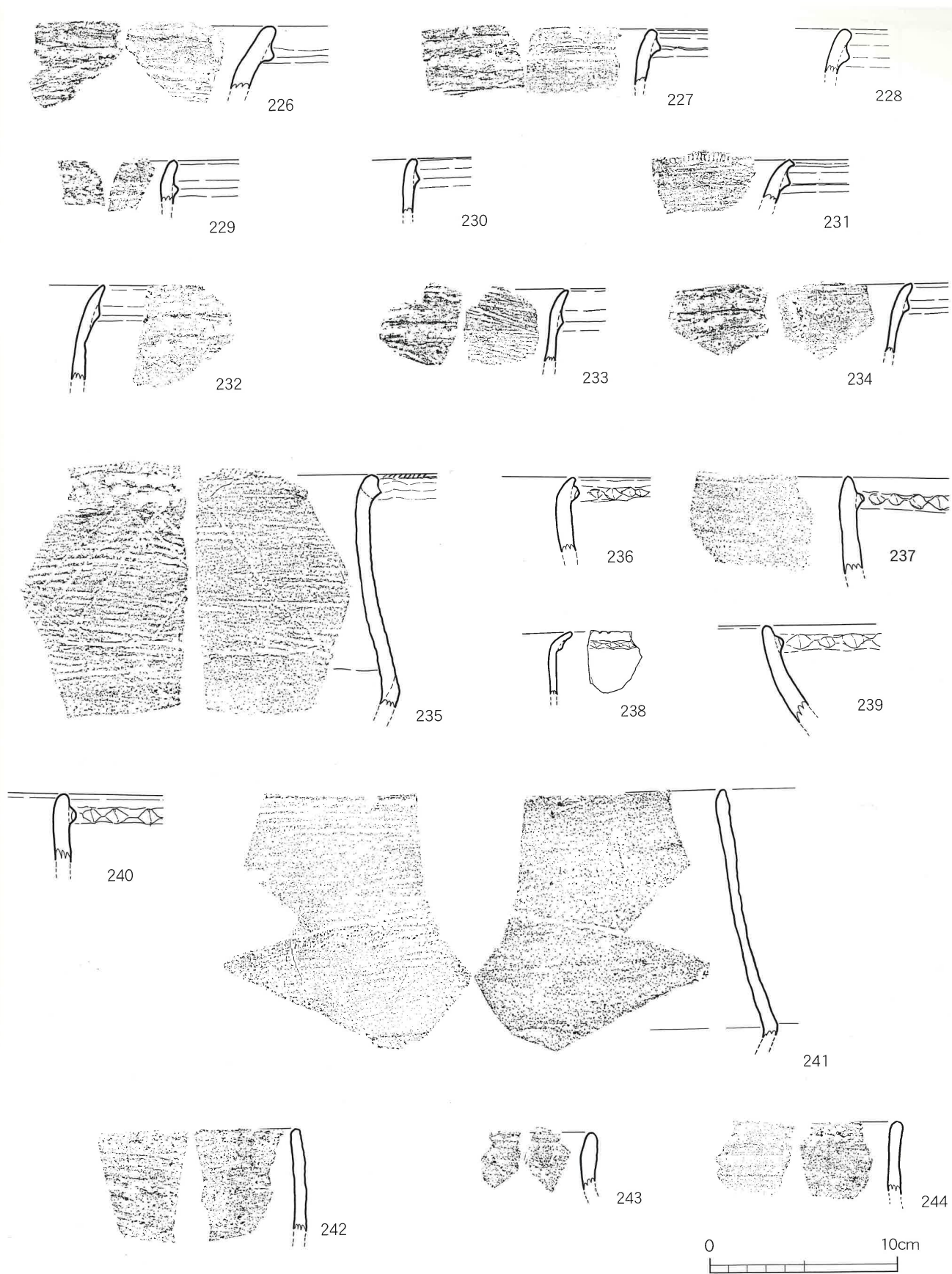


第22图 包含層出土土器実測图 (3)

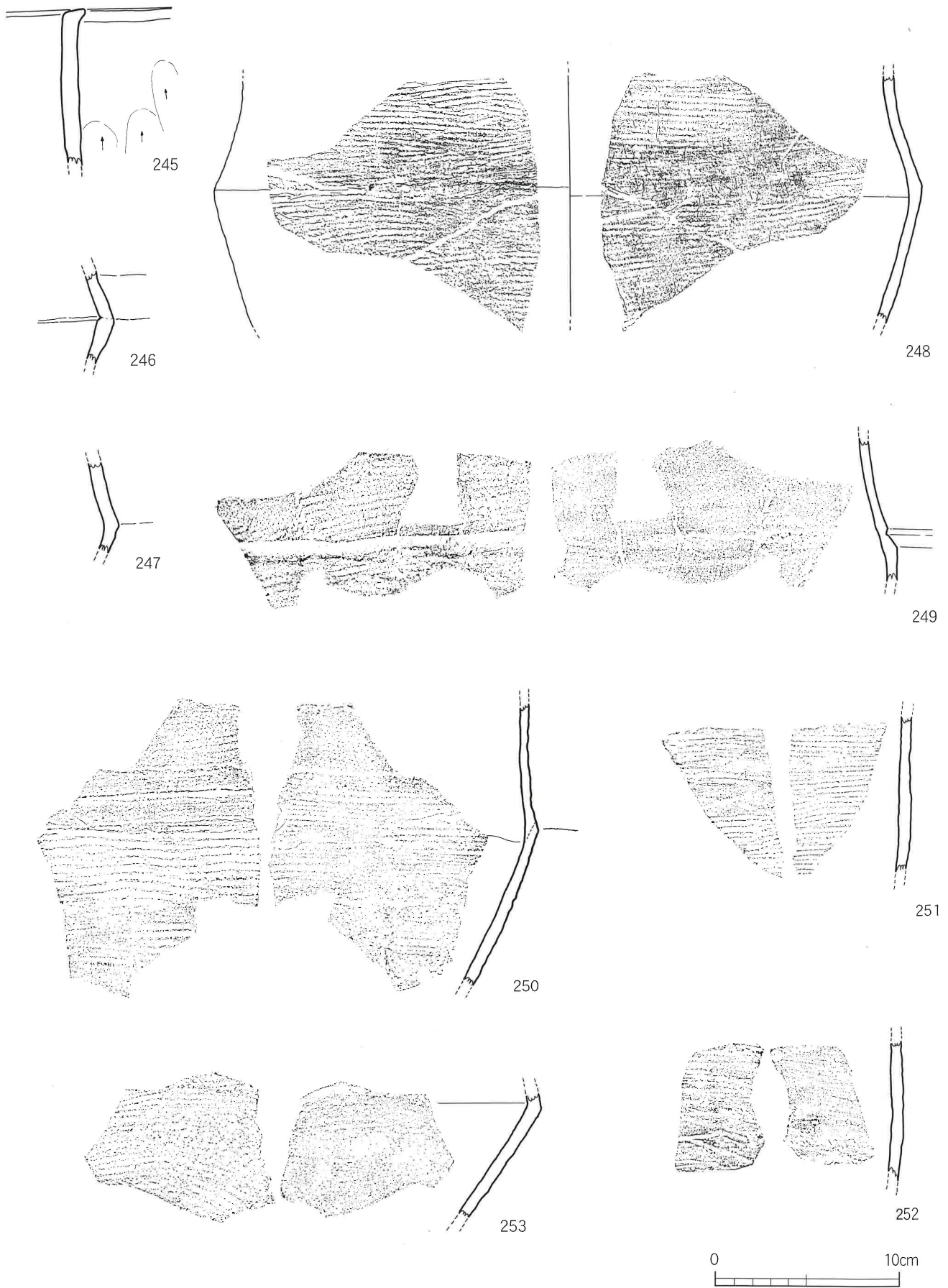




第23図 包含層出土土器実測図(4)

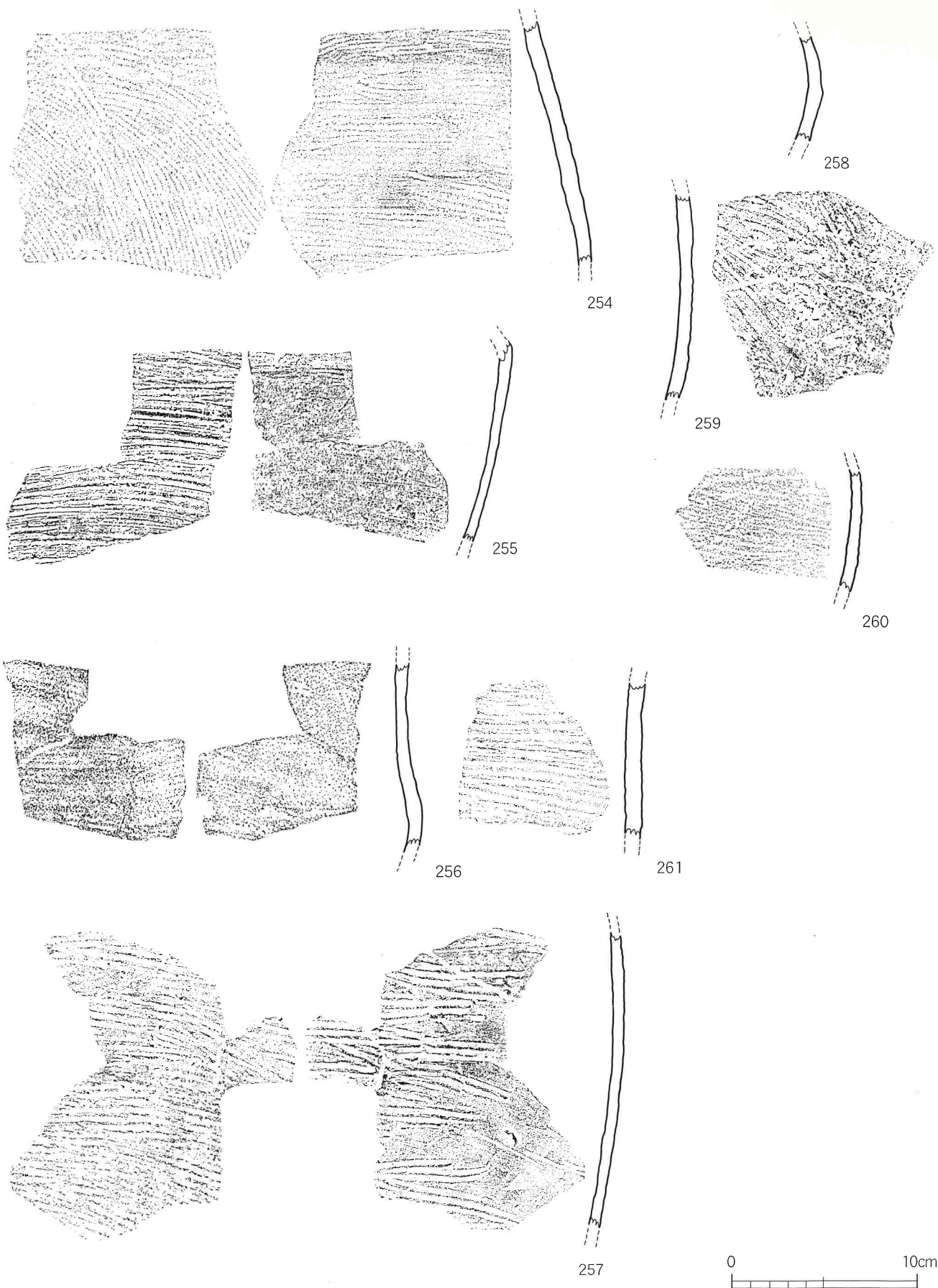


第24図 包含層出土土器実測図（5）

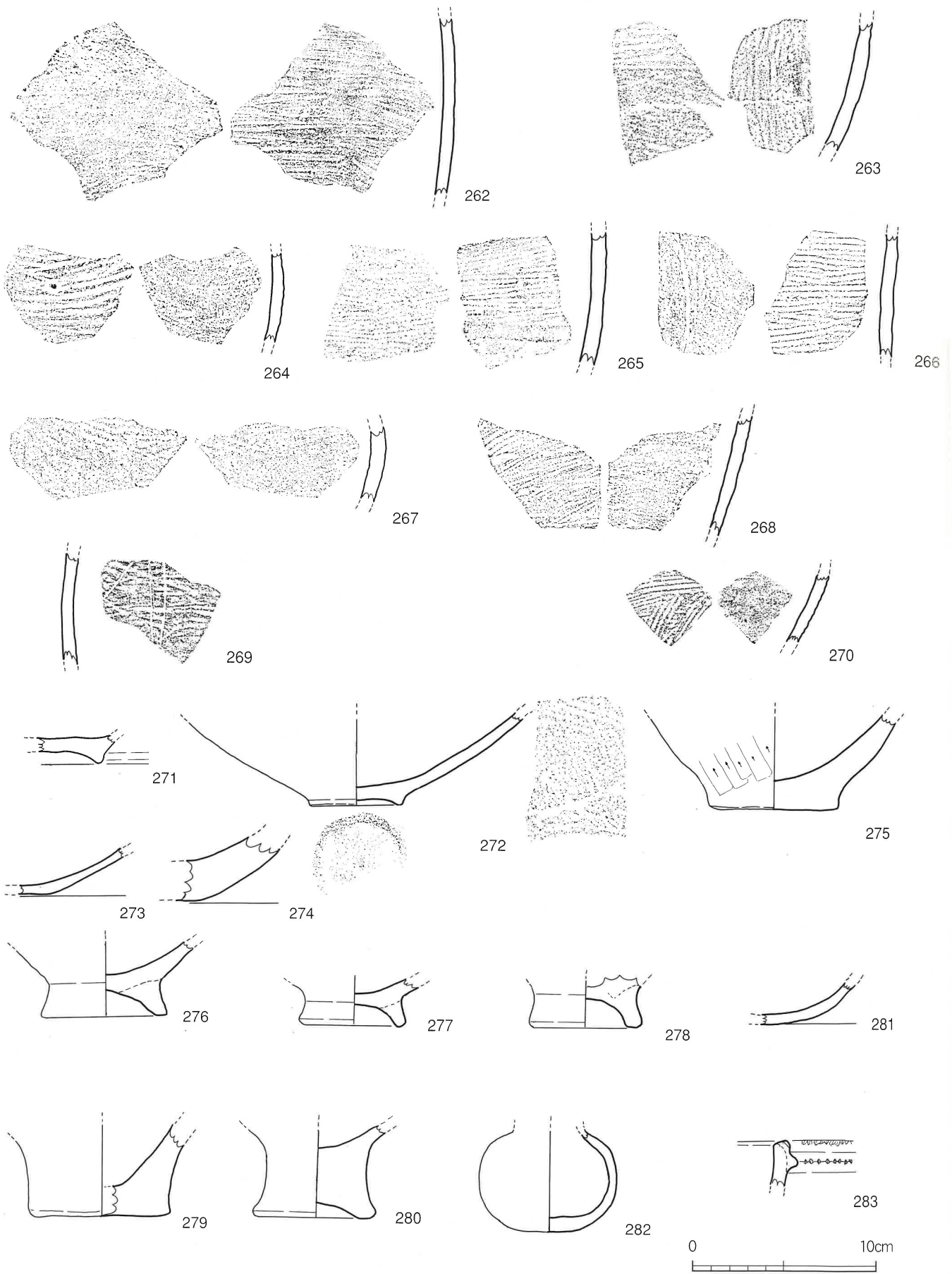


第25図 包含層出土土器実測図（6）





第26图 包含層出土土器実測图（7）



第27图 包含層出土土器実測图 (8)



表9 包含層出土土器観察表(1)

挿図 番号	出土 地点	遺物 番号	器種	分類	胎土	色調		調整		法量 (cm)				施文等
						内面	外面	内面	外面	口径	器高	胴部 最大径	底径	
20図149	B 3	133	浅鉢	IA	角閃石 長石	褐灰色	褐灰色	平滑ナデ	ミガキ	-	-	-	-	鱗状突起 1条無刻目突帯
150	B 2	一括	"	II F	"	"	"	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-	-	鱗状突起
151	C 9	159	"	IA	"	褐色	褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	-	-	-	-	"
152	B 2	一括	"	II J	"	灰黄褐色	灰白色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	内面に1条沈線
153	A 2	3467.116	"	IB	"	黒色	暗灰黄色	平滑ナデ	平滑ナデ	-	-	-	-	黒斑あり
154	B 2	35	"	II G1	"	黒褐色	灰黄褐色	ナデ ミガキ	ナデ	-	-	-	-	
155	"	184	"	"	"	"	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-	-	
156	"	17	"	II G2	"	黄橙	灰白色	平滑ナデ	平滑ナデ	37.5	-	-	-	
157	"	26	"	"	"	灰褐色	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-	-	
158	C 9	21	"	II G1	"	灰黄褐色	灰黄褐色	"	"	21.0	-	-	-	波状口縁 穿孔あり
159	B 3	78	"	IC	"	黒褐色	黒褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	32.1	-	34.0	-	
160	"	20	"	II H	"	鈍い黄橙	鈍い黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-	-	
161	C 9	121	"	IC	"	黒褐色	黒褐色	ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ	-	-	-	-	
162	"	122	"	"	"	"	"	"	"	-	-	25.0	-	
163	C 8	24	"	II H	"	灰色	灰色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	
164	B 2	一括	"	"	角閃 長 石英 金雲	褐色	鈍い橙	"	"	-	-	-	-	
165	"	"	"	"	角閃 長 金雲	灰黄色	灰黄色	ナデ ミガキ	ナデ	-	-	-	-	
166	D 8	20	"	IC	角閃石 長石	灰褐色	灰褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	-	-	-	-	黒斑あり
167	B 2	46.65.124. 125.254	"	II	"	黒褐色	黒褐色	"	貝殻条痕 ヘラミガキ	39.4	-	33.0	-	"
21図168	D 9	6	"	ID	"	灰褐色	赤褐色	"	ヘラミガキ	40.0	-	-	-	波状口縁 黒斑あり
169	B 2	一括	"	II J	"	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	-	-	-	-	
170	"	140.263 270	"	ID	"	灰白色	灰白色	ヘラミガキ	平滑ナデ	17.2	5.6	-	-	黒斑あり
171	"	24.156	"	II J	"	橙色	黄灰色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	
172	D 9	35	"	ID	"	"	橙色	ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ	-	-	-	-	波状口縁 黒斑あり
173	B 2	161	"	II J	"	黒褐色	黄灰色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	
174	B 3		"	IE	"	淡黄色	淡黄色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	30.0	-	11.0	-	黒斑あり
175	B 2	64.104 113	"	II K	"	黄灰色	灰白色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	波状口縁
176	C 9	181	"	"	"	灰白色	"	"	"	-	-	-	-	
177	B 2	一括	"	"	"	黒褐色	褐灰色	"	"	-	-	-	-	
178	"	"	"	IE	"	黒色	鈍い褐色	ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラケズリ	-	-	-	-	黒斑あり
179	"	91	"	II J	"	黒褐色	黒褐色	ヘラケズリ ナデ	ヘラケズリ ナデ	-	-	-	-	
180	"	141	"	IE	"	黒色	灰黄色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	-	-	-	-	黒斑あり
181	"	一括	"	II J	"	鈍い黄橙	鈍い黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-	-	
182	"	"	"	"	"	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	
183	"	"	"	"	"	浅黄橙	浅黄橙	"	"	-	-	-	-	
184	"	157.288	"	IE	"	黒色	灰黄色	平滑ナデ	平滑ナデ	-	-	-	-	赤彩あり
185	"	2	"	"	"	黄灰色	黄灰色	平滑ナデ ヨコナデ	平滑ナデ 貝殻条痕	-	-	-	-	黒斑あり
186	"	一括	"	"	"	黒色	黒色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	
187	"	1	深鉢	III A2	"	黒褐色	褐色	ナデ ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ	32.0	-	33.0	-	無刻目突帯 外2条、 内1条沈線
22図188	"	4.5.6	鉢	VI A	角閃 長 石英	灰白色	浅黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	20.4	-	黒斑あり スス付着

表10 包含層出土土器観察表(2)

挿図 番号	出土 地点	遺物 番号	器種	分類	胎土	色調		調整		法量 (cm)				施文等
						内面	外面	内面	外面	口径	器高	胴部 最大径	底径	
22図189	B 2	303	鉢	ⅥB	角閃石 長石	橙色	灰褐色	貝殻条痕 ナデ	貝殻条痕	-	-	-	-	
190	"	一括	"	"	角閃 長 石英	褐色	黒色	"	"	15.8	-	-	-	
191	B 3	45	"	"	角閃石 長石	褐灰色	褐灰色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	-	-	-	-	輪積み痕あり
192	B 2	一括	"	"	角閃 長 金雲	橙色	橙色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	赤彩あり
193	B 3	70	高坏	Ⅶ	角閃石 長石	黒褐色	灰色	"	貝殻条痕 ナデ	-	-	-	-	
194	C 9	43~45.148	深鉢	ⅢA1	角閃 長 石英 金雲	褐色	褐色	貝殻条痕 ナデ	貝殻条痕 ナデ	-	-	-	-	鱗状突起 1条無刻目突帯
195	B 2	3	"	"	"	淡黄色	黄灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-	-	"
196	"	一括	"	ⅢA3	角閃石 長石	灰白色	灰白色	貝殻条痕	貝殻条痕 ナデ	-	-	-	-	1条無刻目突帯
197	D 9	20.21	"	ⅢA4	角閃 長 金雲	黒色	鈍い黄橙	ナデ	"	-	-	-	-	"
198	C 9	105	"	"	"	浅黄橙	"	"	"	-	-	-	-	"
199	B 2	一括	"	ⅢA2	角閃 長 石英	鈍い黄橙	灰黄褐色	"	ナデ	-	-	-	-	"
200	"	261	"	ⅢA4	角閃石 長石	褐灰色	褐灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-	-	"
23図201	C 9	9.98	"	"	"	鈍い黄橙	灰白色	貝殻条痕	貝殻条痕	-	-	-	-	"
202	D 9	19	"	"	"	黒褐色	黒褐色	ナデ	貝殻条痕 ナデ	-	-	-	-	"
203	B 2	273	"	"	"	黒色	鈍い褐色	"	ナデ	-	-	-	-	"
204	"	一括	"	ⅢA3	"	黒褐色	黒褐色	"	"	-	-	-	-	口唇部刻目 1条無刻目突帯
205	"	14	"	"	"	鈍い赤褐	鈍い赤褐	"	"	-	-	-	-	1条無刻目突帯
206	"	205	"	"	角閃 長 金雲	灰黄褐色	黒褐色	貝殻条痕	"	-	-	-	-	"
207	"	59	"	"	角閃石 長石	黒褐色	"	ナデ	"	-	-	-	-	"
208	"	234	"	"	"	暗灰黄色	暗灰黄色	"	"	-	-	-	-	"
209	"	一括	"	ⅢB1	角閃 長 石英 金雲	黒色	鈍い黄橙	貝殻条痕 ナデ	貝殻条痕 ナデ	-	-	-	-	1条無刻目突帯 沈線2条
210	"	74	"	"	角閃 長 石英	灰黄色	灰白色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	1条無刻目突帯
211	"	一括	"	ⅢA4	角閃石 長石	黒色	黒色	"	"	-	-	-	-	"
212	"	"	"	ⅢA3	"	褐灰色	褐灰色	"	"	-	-	-	-	"
213	C 9	32	"	"	"	黒褐色	黒褐色	貝殻条痕	貝殻条痕 ナデ	-	-	-	-	"
214	B 2	7	"	"	"	鈍い黄橙	灰白色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	"
215	"	一括	"	ⅢA4	"	黒褐色	黒褐色	"	"	-	-	-	-	"
216	D 8	18	"	ⅢA3	"	灰白色	灰白色	貝殻条痕 ナデ	貝殻条痕 ナデ	-	-	-	-	"
217	"	15	"	"	"	褐灰色	褐灰色	ナデ ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ	-	-	-	-	"
218	B 2	一括	"	ⅢB2	"	黒色	黄橙	ヨコナデ	貝殻条痕	-	-	-	-	"
219	"	"	"	ⅢA4	"	褐灰色	鈍い黄橙	ナデ	貝殻条痕 ナデ	-	-	-	-	"
220	"	111	"	ⅢA3	"	褐色	褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	-	-	-	-	"
221	"	一括	"	ⅢB1	"	黒色	黒色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-	-	"
222	包含層	"	"	"	"	褐灰色	褐灰色	"	"	-	-	-	-	"
223	B 8	25	"	ⅢA4	"	黒灰色	"	"	"	-	-	-	-	"
224	C 8	36	"	"	"	鈍い褐色	橙色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	"
225	C 8	17.129	"	ⅢB2	"	鈍い黄橙	黒褐色	貝殻条痕 ナデ	貝殻条痕 ナデ	-	-	-	-	"
24図226	B 2	一括	"	ⅢA3	"	黒褐色	"	"	"	-	-	-	-	"
227	"	"	"	"	"	"	"	"	"	-	-	-	-	"
228	B 9	3	"	"	"	黄灰色	淡黄色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	"

表11 包含層出土土器観察表(3)

挿図 番号	出土 地点	遺物 番号	器種	分類	胎土	色調		調整		法量 (cm)				施文等
						内面	外面	内面	外面	口径	器高	胴部 最大径	底径	
24図229	B 2	一括	深鉢	ⅢA3	角閃石 長石	黒色	褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	-	-	-	-	1条無刻目突帯
230	B 9	6	"	"	"	黒褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	"
231	"	1	"	ⅢA4	"	黄灰色	灰白色	貝殻条痕	貝殻条痕	-	-	-	-	口唇部刻目 1条無刻目突帯
232	C 9	202	"	ⅢA3	"	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	-	-	-	-	1条無刻目突帯
233	"	52	"	"	"	灰白色	灰白色	貝殻条痕	ナデ	-	-	-	-	"
234	B 2	68	"	"	"	黒色	黒色	ナデ	貝殻条痕 ナデ	-	-	-	-	"
235	"	10,11	"	IVC1	"	黄灰色	黄灰色	貝殻条痕	貝殻条痕	-	-	-	-	口唇部刻目 1条無刻目 突帯 斜交沈線
236	"	一括	"	IVC2	"	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	1条刻目突帯 黒斑
237	"	"	"	IVC3	"	灰黄色	灰黄色	貝殻条痕 ヨコナデ	貝殻条痕	-	-	-	-	1条刻目突帯
238	D 9	42	"	IVC2	"	黒褐色	褐色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	口唇部刻目 1条刻目突帯
239	B 2	一括	"	IVC4	"	淡黄色	淡黄色	貝殻条痕	"	-	-	-	-	"
240	"	"	"	IVC3	角閃 長 石英 金雲	灰色	灰色	ナデ	"	-	-	-	-	"
241	C 9	77,78	"	VD	角閃 長 石英	浅黄橙	浅黄橙	"	"	-	-	-	-	
242	D 8	18	"	VE	角閃 長 金雲	鈍い黄橙	鈍い黄橙	不明	貝殻条痕 ナデ	-	-	-	-	
243	B 2	239	"	VF	角閃石 長石	灰白色	黒色	貝殻条痕	貝殻条痕	-	-	-	-	
244	C 9	68	"	"	"	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	"	-	-	-	-	
25図245	B 3	62	"	VG	"	"	"	"	ナデ	-	-	-	-	
246	B 2	136.179. 193	"	-	"	暗褐色	暗褐色	貝殻条痕 ナデ	貝殻条痕 ナデ	-	-	-	-	黒斑あり
247	"	236	"	-	"	黒褐色	褐灰色	貝殻条痕	ナデ	-	-	-	-	"
248	"	14~15	"	-	"	灰白色	灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	39.0	-	"
249	C 9	60.196	"	-	"	褐灰色	鈍い黄橙	"	貝殻条痕 ナデ	-	-	-	-	屈曲部に1条沈線
250	C 9	170.172 174	"	-	"	淡黄色	淡黄色	貝殻条痕	貝殻条痕	-	-	-	-	
251	B 2	233.237	"	-	"	黒色	灰黄褐色	"	"	-	-	-	-	
252	"	225	"	-	"	褐灰色	鈍い黄橙	"	"	-	-	-	-	赤変あり スス付着
253	包含層	一括	"	-	"	黒色	黒色	"	"	-	-	-	-	
26図254	B 2	18	"	-	"	褐灰色	褐灰色	貝殻条痕 ナデ	"	-	-	-	-	内面に黒斑
255	B 2	2.101.102	"	-	"	灰白色	灰黄褐色	貝殻条痕	"	-	-	-	-	黒斑あり
256	B 2	6	"	-	"	褐灰色	褐色	"	"	-	-	-	-	
257	C 9	10.57.173 175	"	-	"	鈍い黄橙	褐灰色	"	"	-	-	-	-	
258	B 2	一括	"	-	"	暗灰黄色	灰白色	"	"	-	-	-	-	
259	"	8	"	-	"	淡黄色	灰黄色	"	"	-	-	-	-	黒斑あり
260	B 3	61	"	-	"	褐灰色	赤褐色	"	"	-	-	-	-	赤変あり
261	B 2	238	"	-	"	黒色	鈍い黄橙	"	"	-	-	-	-	黒斑あり
27図262	C 8	14	"	-	"	鈍い黄橙	"	"	"	-	-	-	-	
263	A 2	30.40	"	-	"	黒褐色	黒褐色	ナデ	"	-	-	-	-	
264	C 9	53	"	-	"	黒色	鈍い橙	貝殻条痕	"	-	-	-	-	
265	B 2	18	"	-	"	"	"	"	"	-	-	-	-	
266	"	221	"	-	"	灰色	灰白色	"	不明	-	-	-	-	
267	"	188	"	-	"	橙色	橙色	"	貝殻条痕	-	-	-	-	
268	"	一括	"	-	"	黒褐色	鈍い黄橙	"	"	-	-	-	-	

表12 包含層出土土器観察表（4）

挿図 番号	出土 地点	遺物 番号	器種	分類	胎土	色調		調整		法量 (cm)				施文等
						内面	外面	内面	外面	口径	器高	胴部 最大径	底径	
27図269	B 2	一括	深鉢	—	角閃石 長石	褐灰色	褐灰色	貝殻条痕 ナデ	貝殻条痕 ナデ	—	—	—	—	斜交沈線あり
270	"	"	"	—	"	"	橙色	ナデ	貝殻条痕	—	—	—	—	
271	B 1	"	浅鉢	—	"	浅黄橙	浅黄橙	"	ナデ	—	—	—	—	
272	B 2	119~121 274	"	—	"	黄灰色	褐灰色	"	貝殻条痕 ナデ	—	—	—	—	
273	"	67	"	—	"	黒色	黒褐色	"	ナデ	—	—	—	—	
274	包含層	一括	壺	—	"	灰白色	褐色	ナデ 押え	"	—	—	—	—	
275	B 2	"	"	—	"	橙色	橙色	ナデ	ヘラケズリ	—	—	—	—	黒斑あり スス付着
276	"	148	深鉢	—	"	褐灰色	浅黄橙	貝殻条痕	貝殻条痕	—	—	—	—	
277	"	一括	"	—	"	"	"	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
278	"	253	"	—	"	浅黄橙	"	不明	"	—	—	—	—	
279	"	一括	甕	—	"	灰黄褐色	"	ナデ	"	—	—	—	8.0	
280	"	36	"	—	"	灰白色	黄灰色	"	"	—	—	—	6.8	
281	B 1	390	鉢	—	"	黒色	灰白色	"	"	—	—	—	—	
282	包含層	一括	壺	—	角閃 長 石英 金雲	浅黄橙	浅黄橙	"	"	—	—	7.8	3.0	黒斑あり
283	D 8	23	甕	—	角閃石 長石	鈍い橙	鈍い橙	"	"	—	—	—	—	口唇部刻目 1条刻目突帯

### Ⅲ. まとめ

これまで述べたように、荏隈杉下遺跡からは、縄文時代晩期・弥生時代後期・歴史時代の遺構・遺物が確認された。今回の調査区は大分平野の後背部に当たる庄ノ原台地の谷あいから流れこむ小河道の沖積作用と南側に接するように流れる尼ヶ瀬川の氾濫によって形成された地域であり、生活の場としての立地条件から見るとあまり良好な環境ではないが、縄文期には、このような沖積地を生活の場として用いていたことを示したものである。大分平野では、現在ここ以外に植田平石遺跡、植田市遺跡、玉沢地区条里跡の二反田地区・山伏田地区、羽田遺跡、丹生川遺跡、牧六分遺跡、下郡遺跡、雄城台遺跡でほぼ同時期の遺物が確認されている。また隣接する挾間町には下黒野遺跡がある。これらのうち雄城台遺跡及び下黒野遺跡は台地上にあるが、後はすべて沖積地上に所在する。このように大分平野では、縄文時代の後半から晩期には沖積地にも遺跡が広がるようになり、弥生時代の新しい文化を受容しつつさらなる発展を遂げるようになる。

以下各時期の総括を行う。

#### 1. 縄文晩期

包含層の調査で出土した遺物は、石器・土器ともにこの時期の特徴を示すものである。石器のうち石鏃には平面五角形の駒形のもので出土している。包含層以外にも溝状遺構1から同様の石鏃が出土している。この石鏃は縄文晩期によく出土するタイプのものである。土器は浅鉢と深鉢が主体を占める。このなかで口縁部に鱗状突起を施したもの、鍵状口縁をもつ浅鉢、無刻目突帯を施した深鉢など大分県内の縄文晩期土器編年では後半に位置する上菅生B式（註1）と類似した様相を呈する。しかし、共伴遺物に逆「く」の字状口縁をもつ浅鉢や刻目突帯を施す深鉢が若干混じることから、晩期終末に編年される下黒野式の要素もわずかに持つ。また鍵状口縁、鱗状突起、無刻目突帯から刻目突帯へという基本的な土器変化の中に、深鉢で口唇部に刻目を施すものや突帯下にヘラ描きで2本ないし3本の平行する沈線を交差させるものなど、愛媛県（註2）や岡山県（註3）、



山口県（註4）といった瀬戸内海沿岸地域との交流をうかがわせる遺物も出土している。時期的に若干の前後関係はあるが北九州市の長行遺跡でも北部九州地域に瀬戸内的な特徴を持つ遺物が混じる事が報告されている。（註5）

前述のように浅鉢の口縁部形態及び深鉢の無刻目突帯と刻目突帯の出土比率などから、当遺跡の縄文晩期土器は上菅生B式から下黒野式へと変化していく中で漸移的な位置にあるものと思われる。

（註1）高橋 徹「大分県考古学の諸問題（1）－刻目突帯文土器の出現とその展開について－」

『大分県地方史』第98号 大分県地方史研究会 1980年

（註2）『愛媛県史』原始・古代編1 愛媛県 1982年

（註3）『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県 1986年

『南方前池遺跡』 岡山県山陽町教育委員会 1995年

（註4）『大判遺跡 埴生口遺跡』下関市埋蔵文化財調査報告書46 下関市教育委員会 1994年

（註5）『長行遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書 第20集

財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1983年

## 2. 弥生時代

2条の溝状遺構はいずれも弥生時代に属するが若干の時期差がありそうである。溝1は二重口縁壺を見ると締まり気味の頸部に刻目突帯や断面三角突帯を1条あるいは3条施し、口縁部はやや短めで外反する。端部は下がり気味でそこから直立ないしは内傾気味の二重口縁部が立ち上がるタイプのものが多い。さらに二重口縁部分は比較的長く伸びるものと短いものが見られる。

玉永光洋氏が安国寺遺跡の報告で大分平野を中心とした弥生時代後期後半から古墳時代前期前半までの編年作業を行っているが（註1）、この編年表を参考にすると後期後半から終末期の中に含まれそうである。ただ、小型丸底壺などが出土していることから古墳時代初頭までは時期幅を考える必要はあるであろう。溝状遺構2も二重口縁壺の形態からは溝状遺構1と上限における時期差はあまりないものと思われるが、第11図86や第13図135のように指による上げ底を持つ甕が出土している。これは大分市尾崎遺跡SH-24より出土している甕と非常に類似していて（註2）、前出の玉永氏の編年によると後期後半でもやや古い様相が見られるものである。また長胴化が目立つ甕など終末期の遺物、さらに第12図90や100、101のように古墳時代に入るものも含まれていて、下限は溝状遺構1と同様時期幅がある。土層観察でも溝状遺構2は掘り直しの痕跡が認められている。遺構のあり方も部分的に矢板列や杭列が設けられ、自然河道から一步前進したものと言える。ただし調査区からは集落の痕跡及びプラントオパール分析では周辺に水田が存在していた可能性は低くその性格は特定しにくい。ここから北の台地上にはほぼ同時期の集落である尼ヶ城遺跡があり（註3）同遺跡との関係なども含めて考えていく必要もあるであろう。

（註1）『安国寺遺跡』大分県国東町文化財調査報告書 第4集 国東町教育委員会 1989年

（註2）『尾崎遺跡』大分市立明治北小学校建設に伴う発掘調査概報 大分市教育委員会 1984年

（註3）『大分市史』上 大分市 1987年

## 3. 歴史時代

溝1は出土遺物から概ね9世紀前半代の所産と思われるが、これ以外にこの時期の遺構や遺物はほとんど出土していない。しかし溝の方向がほぼ東西方向を向いていることから、なんらかの規格性も認められるが遺構の性格は特定しにくい。



#### はじめに

イネをはじめアワ・ヒエ・キビなど主要な雑穀類を含むイネ科植物の葉身中に存在する機動細胞は、その細胞壁に珪酸が沈積し、機動細胞の形状を保ったまま、永く土壌中にとどまっている。そのため、土壌中に残った珪化機動細胞の化石（プラント・オパール）を顕微鏡下で検出することで、給源植物種やその量を推定することができる。

今回、荏隈杉下遺跡から刻目突帯文土器を含む縄文晩期遺物が多量に検出された。また、これに接して検出された溝状遺構 1 は、ほぼ弥生期と考えられるが、周囲には縄文晩期の堆積層が含まれている可能性がある。

すでにこの時期、北九州では水田イナ作が始まっており、本遺跡でも初期の水田が伝播している可能性が考えられる。今回、水田の開始時期についての示唆を得る目的で溝状遺構 1 堆積土壌のプラント・オパール定量分析をおこなったので報告する。

#### 分析方法

発掘調査区の北で溝状遺構 1 が検出された 6 トレンチの壁面からプラント・オパール分析試料を採取した。溝状遺構 1 の時期は必ずしも明らかではないが、現在、発掘区の南を流れる尼ヶ瀬川は、西から流下してこの付近で大きく南に方向を変えており、尼ヶ瀬川かその支流によって形成されたと考えられる。断面での観察では、溝状遺構 1 から 5m ほど南西側に砂質の XII 層があって、その上にやや粘性の強い XI 層が乗っている。ここに古い溝があった可能性がある。これが埋没した前後に、溝状遺構 1 が形成されている。このとき、縄文時代晩期の刻目突帯文土器などの遺物を包含する VII'・VII 層を切っており、あらたに IV 以上 I 層までが堆積したと考えられる。礫の多い V 層は VI 層と同じ時期の堆積であろう。最後に堆積したと考えられる I 層が弥生の遺物を包含するので、ほぼ弥生時代を下限とすると考えられる。最も古いと考えられる XII・XI 層の堆積時期は不明であるが、XI 層の上面は VII 層上層の標高にほぼ対応していること、弥生期の X 層の下位に位置するので、縄文晩期まで遡る可能性も考えられる。土層断面の観察から、青灰色の基盤層と思われる VIII 層、縄文遺物を包含する VII'・VII 層を除いて、いずれの土層も傾斜しており、広い面積をもつ安定した水田土層とは考えられない。しかし一時期にせよ水田として使われたり、あるいは上流側に水田があったなら、イネ機動細胞プラント・オパールが検出されると期待できる。

また、XI 層の東北部を覆う IX 層は、溝状遺構 1 に向かって傾斜しているが、他の層と異なり明るい黄褐色のローム質で、人為的な盛り土と考えられる。このロームで畦畔が作られていた可能性も指摘されていた。

6 トレンチは溝状遺構 1 を北東から南西にほぼ直角に横断しており、その南東壁面から試料を採取した。トレンチ北東端、溝状遺構 1 中央部、ローム北東端、ローム中央部、ローム南西端、トレンチ南西端とした。

プラント・オパールの大きさは 50  $\mu$ m 程度で、肉眼では観察できない。そのため後代の攪乱や採取時の汚染（コンタミネーション）に対して細心の注意が必要である。そのため、採土管を用いて注意深く採取した。採取した試料は採土管につめたまま研究室に持ち帰り図 1 に示す手順に従って定量分析を行った。

#### 分析結果および考察

主要なプラント・オパール分析結果を植物体重に換算して図 3～図 8 に示す。単位は広さ 10a

(1,000m<sup>2</sup>) 深さ1cmの土壤中に埋没した植物の地上部乾物重 (t) で示してある。イネについては、生産されたであろう粍量も推定してあわせ示した (細線)。植物体重に換算するには表1の、現生植物体中の珪化機動細胞密度を使った。

現在まで発掘によって畦畔などの遺構が検出された水田遺構の作土層の分析結果では経験的にイネ粍に換算して1 (t/10a/cm) を超えることが多い。トレンチ北端 (図3) では、弥生時代の遺物を含むI層から、ほぼこれに匹敵する多量のイネ機動細胞プラント・オパール (以後、機動細胞プラント・オパールを省略) を検出した。縄文時代晩期、と考えられるVII'・VII層ではタケ亜科、ウシクサ族などは検出したが、イネは検出できなかった。VIII層も少量のタケ亜科が検出されたただけであった。溝状遺構1中央部 (図4) では、底部に堆積する砂質シルトのIV層からはイネを検出できなかった。ローム層の最北東端部 (図5) では、ローム層の上下にあたるVI'・X層でも同様にイネは検出されなかった。ローム中央部 (図6) でも、ローム本体のIX層とその上位のVI層からはイネが検出されなかった。しかし、ロームの最南西端 (図7) では、ローム本体のIX層でI層に匹敵するイネが検出された。その下位のX層からもイネが検出されている。同じ層でも、やや北東によった位置からは検出されていないので、周囲からの流れ込みの可能性もある。このことは、IX層が人為的な盛り土の可能性が指摘されていることとも符合する。トレンチ南西端 (図8) ではVI層からイネが検出された。やや粘質の強いXI層からは検出されなかったが、縄文期の可能性が考えられるXII層からも検出された。この層の上面は水平に近く、水田の可能性はある。しかし量的にも少なく周辺からの流れ込みも考えられる。1試料だけの分析結果だけで、結論するのはやや危険だが、XII層の時期に、イネが生育していた可能性が高いことを示しているといえよう。

今回の分析の結果、イネ機動細胞プラント・オパールが検出された土層の略図を図2に示す。I層とVI層は、弥生時代の水田層の可能性が高い。X・IX層は弥生時代の水田層の可能性もあるが、ごく周辺に水田があって、その水田土が流れ込んだことが考えられる。XII層は時期が明らかでないが、水田の可能性はある。縄文晩期の遺物を包含するVII'・VII層からは、イネ機動細胞プラント・オパールは検出できなかった。しかし、当時、水田にイネを栽培していたとしても、遺物包含層からイネ機動細胞プラント・オパールが検出されるとは、必ずしもいえない。したがって、縄文晩期に水田イナ作が伝播していたかは不明である。

遺物が少なく、発掘面積も狭かったが、今後、XII層の時期を明らかにすることが望まれる。また、時期はやや新しくなるが、X・IX層の時代には、明らかに周囲にイネが栽培されていた。I・VI層は水田層の可能性すらある。いずれにしても、縄文晩期から弥生期にかけて、周辺において注意深い発掘調査が必要である。

最後に、貴重な分析の機会を与えていただいた関係者に感謝したい。

表1 植物体中の珪化機動細胞密度

プラント・オパール 分析分類名	代表植物		植物体中密度 (104個/g)
イネ	イネ	<i>Oryza sativa</i>	3.40
ヨシ属	ヨシ	<i>Phragmites communis</i>	1.44
タケ亜科	ゴキダケ	<i>Pleiblastus Chino</i>	
		<i>var. virides f. pumilis</i>	20.83
ウシクサ族	ススキ	<i>Miscanthus sinensis</i>	2.79

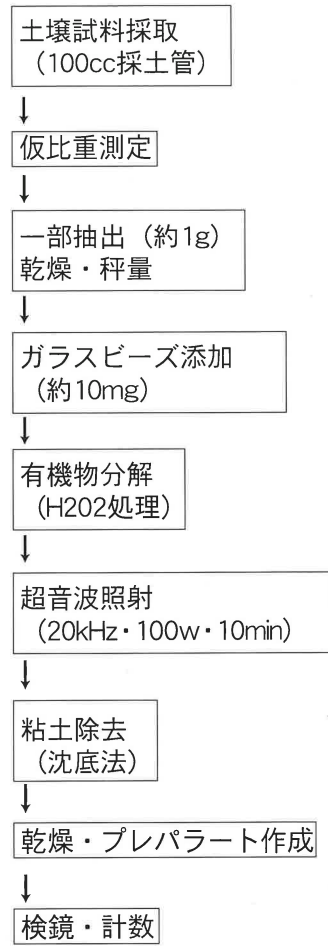


図1 プラント・オパール定量分析手順

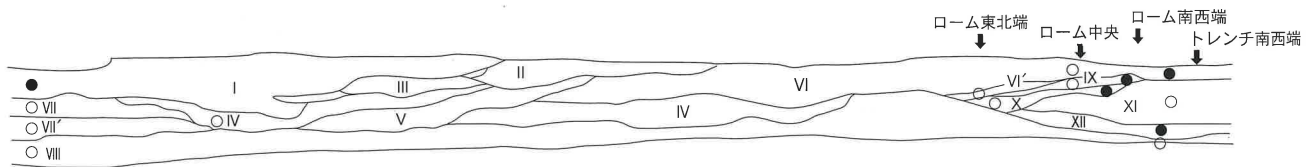


図2 溝状遺構1土層図 (○：試料採取場所 ●：イネ移動細胞プラントオパール検出層)

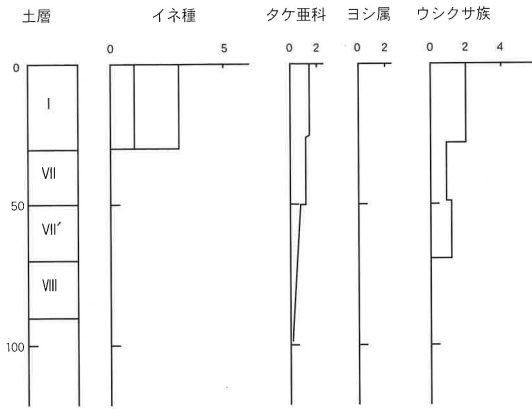


図3. 溝状遺構1北端地点のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10a/cm)

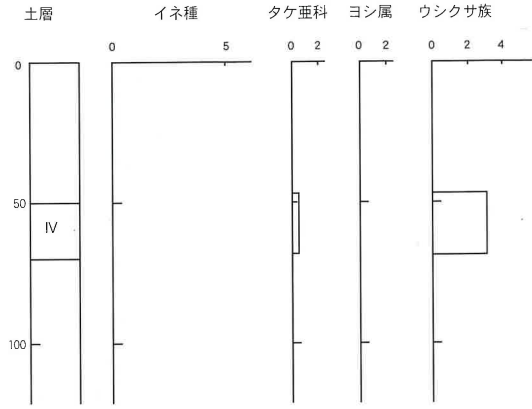


図4. 溝状遺構1中央部のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10a/cm)

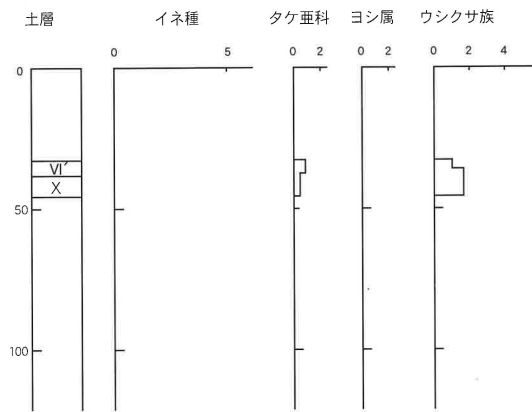


図5. 溝状遺構1ローム北東端のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10a/cm)

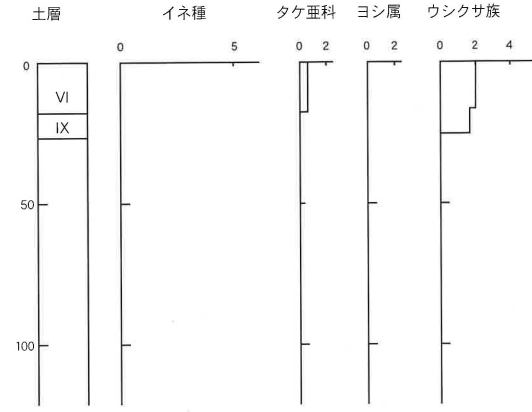


図6. 溝状遺構1ローム中央部のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10a/cm)

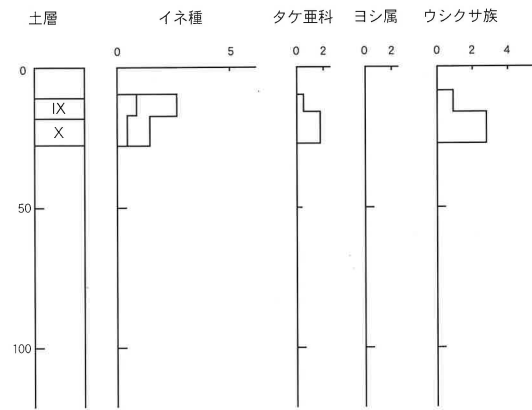


図6. 溝状遺構1ローム南西端地点のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10a/cm)

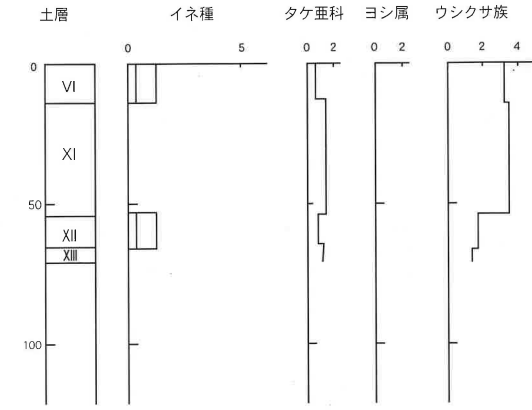
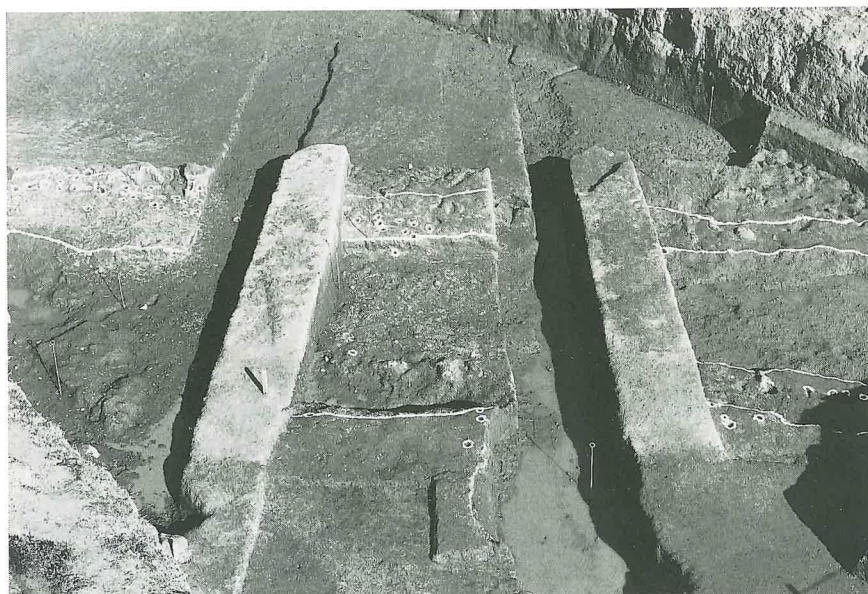


図8. 溝状遺構1ローム南西端地点のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10a/cm)





調査区全景



溝状遺構 1

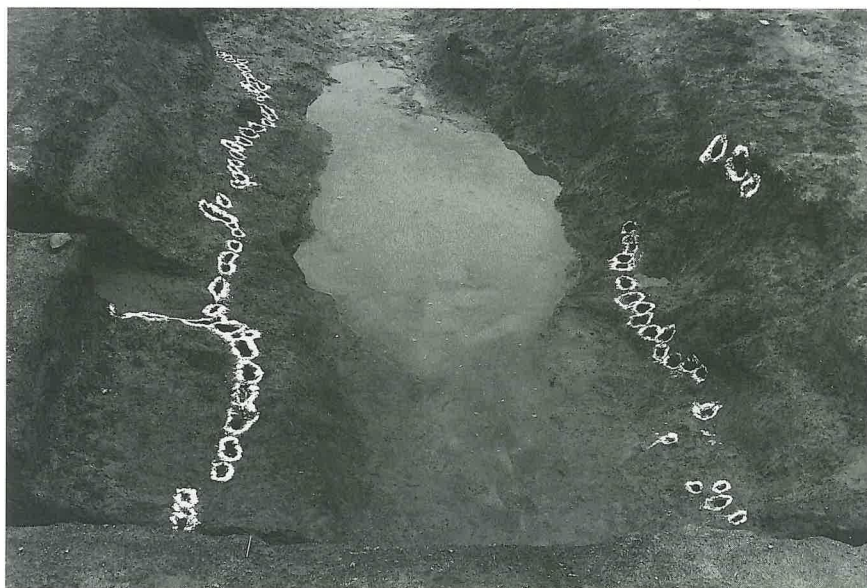


溝状遺構 2  
及び溝 1





溝状遺構 2



溝状遺構 2 内  
矢板列及び杭列



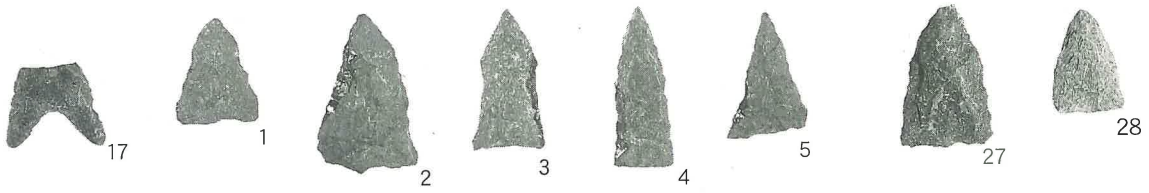
包含層遺物  
出土状況

図版 | 3 | 石器

黒曜石製石鏃

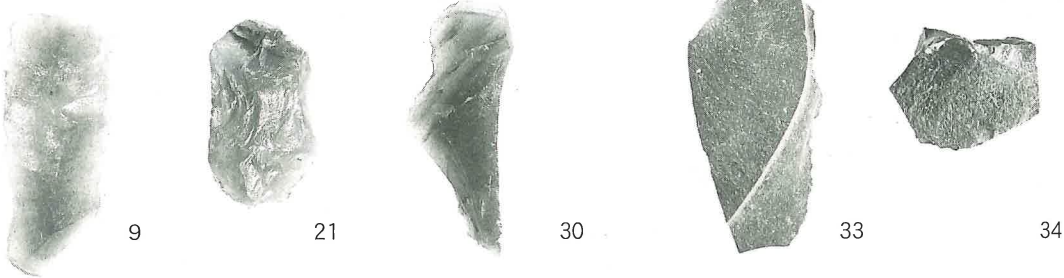
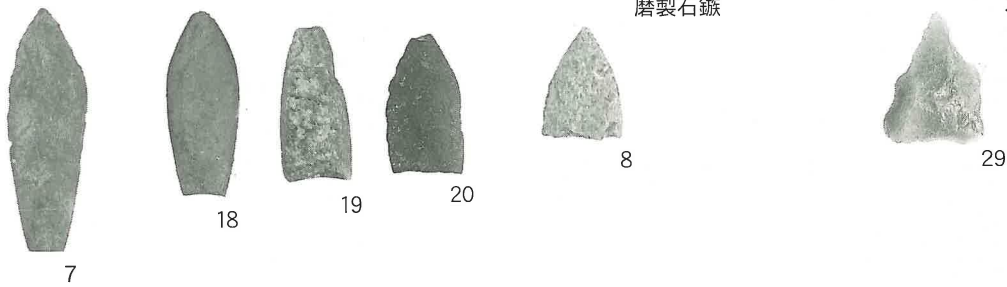


サヌカイト製石鏃



磨製石鏃

石錐

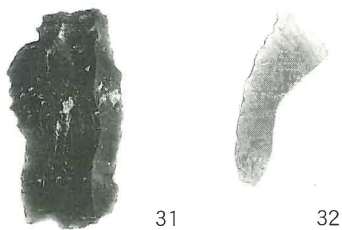


サヌカイト製

黒曜石製

二次加工剥片

1~ 9 溝状遺構1  
14~30 溝状遺構2  
26~34 包含層





図版  
— 4  
石器



36



37



38



39

石斧類



24



25

凹石



12



10



11

敲石



41

磨石



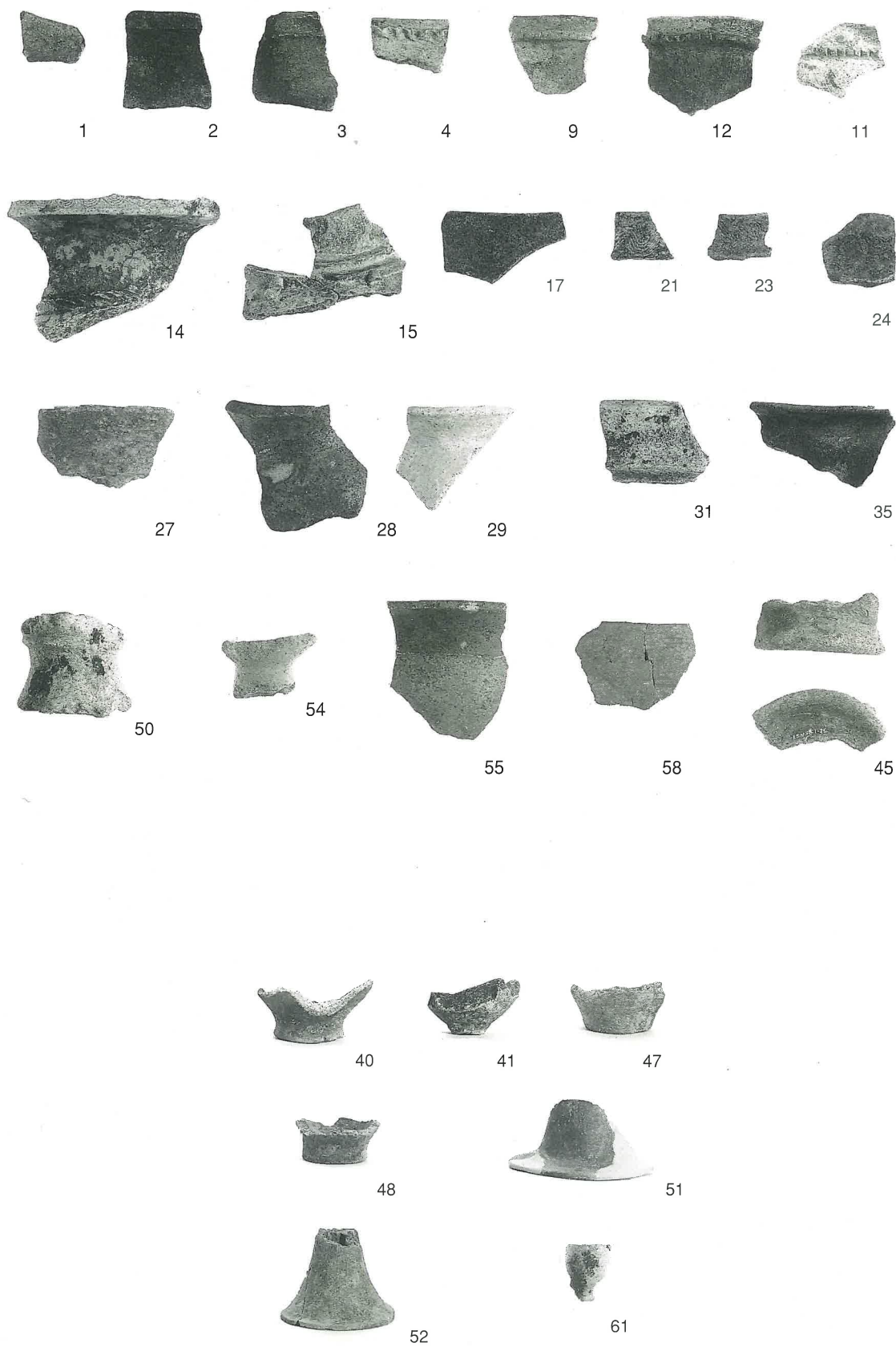
35

石核

10~12 溝状遺構1  
24・25 溝状遺構2  
35~39・41 包含層

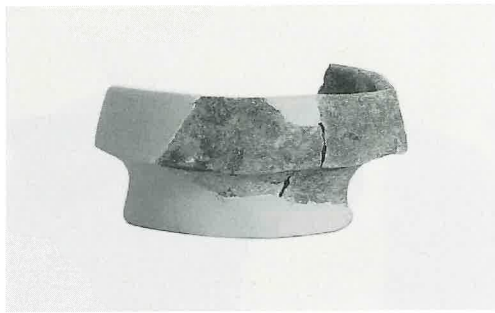
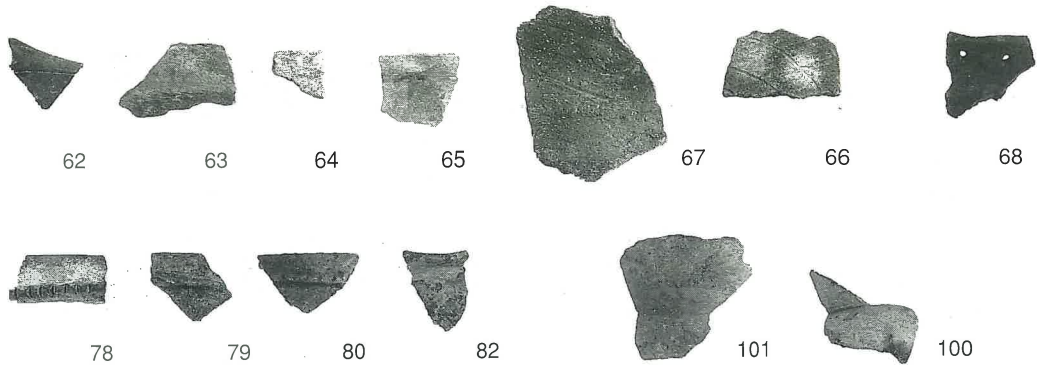


図版 | 5 溝状遺構 1 出土土器

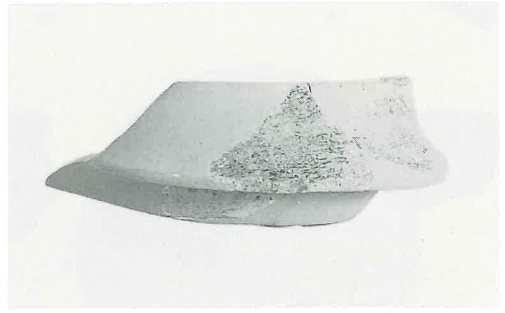


図版—6

溝状遺構2出土土器



73



69



86



88



92



95

図版 17 溝状遺構 2 出土土器



97



102



105



107



113



115



135



136



144

図版 | 8

溝1・包含層出土土器



145



146



147



148

145~148

溝1

149~282

包含層



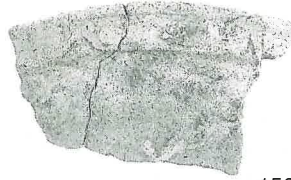
149



154



155



156



158



159



160



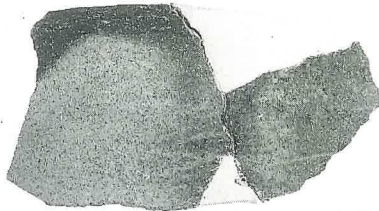
162



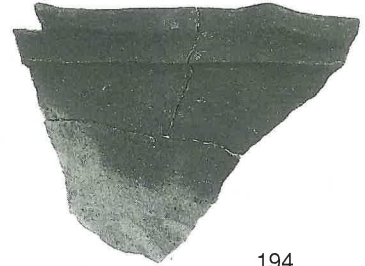
166



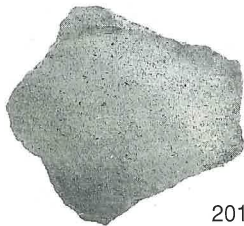
195



197



194



201



202



205



225



237



236



237



239



240



219



231



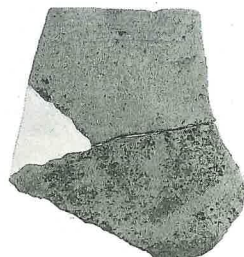
238



215



236



241



245



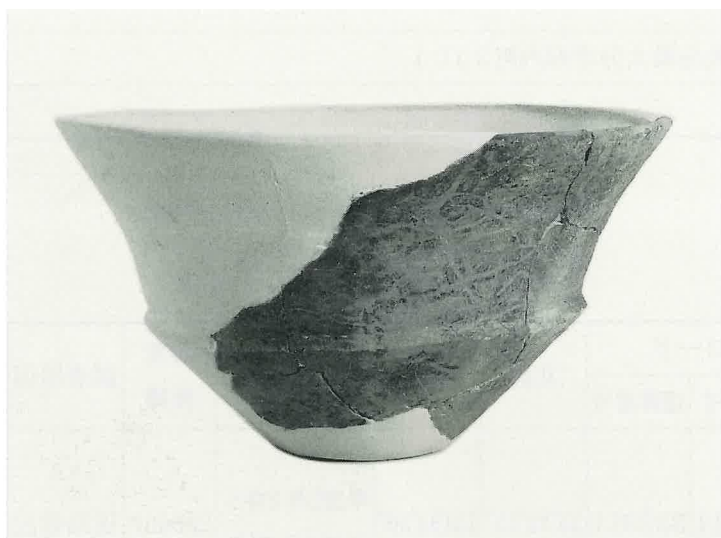
图版一 9 包含層出土土器



170



272



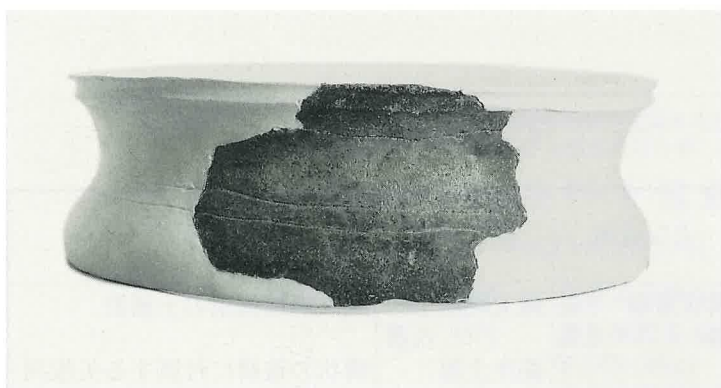
174



273



275



187



276



278



279



280



282

## 報告書抄録

フリガナ	エノクマスギシタイセキ
書名	荏隈杉下遺跡
副書名	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	一
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	(11)
編著者	江田 豊 佐々木 章
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1
発行年月日	1999年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
エノクマスギシタイセキ 荏隈杉下遺跡	オオイタケンオオイタシ 大分県大分市 オオアザエノクマアザスギシタ 大字荏隈字杉下	442011	322311	33°13'15"	131°34'50"	平成5年2月～ 平成5年12月	2000m <sup>2</sup>	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
エノクマスギシタイセキ 荏隈杉下遺跡	包含層	縄文晩期 弥生前期 ∪ 弥生後期 古    代	溝状遺構 2条 溝          1条	縄文晩期土器 石器 弥生土器 石器 土師器	縄文晩期後葉の土器群 溝状の遺構に付属する矢板列

---

九州横断自動車道関係埋蔵  
文化財発掘調査報告書(11)

## 荏隈杉下遺跡

平成11年3月31日

編集 大分県教育庁文化課  
発行 大分県教育委員会  
〒870-0021  
大分市府内町3-10-1  
TEL 0975-36-1111  
印刷 フタバ印刷

---

